目次
改めて真宗総合研究所の「総合」とは 1
2025(令和7)年度「指定研究」等研究成果報告 2
2025(令和7)年度「一般研究」(予備研究)研究成果報告 13
2025(令和7)年度東京分室PD研究員個人研究成果報告 15
公開シンポジウム報告 18
公開研究会・講演会報告 20
国内研究調査報告 28
海外研究調査報告 32
歎異抄ワークショップ開催・参加報告 37
彙報 39

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No. 88 2026. 9. 1.

改めて真宗総合研究所の「総合」とは

真宗総合研究所長　鈴木　寿志

大谷大学真宗総合研究所は、1981（昭和56）年6月1日に旧洗心学寮が改装されて誕生した大学付属の研究所である。その後1992（平成4）年7月1日に寺町今出川にあった旧育英学寮の建物へと移転し、いったん烏丸北大路の敷地から離れて運営された。2001（平成13）年10月に響流館が竣工すると、その翌年の4月2日に響流館4階へと移転し、それ以降現在の場所で研究活動が続けられている。発足時に当時の廣瀬杲学長が大谷大学広報の文章に研究所設置への思いを述べているので、重要な部分を引用してみたい。

「特殊化し個別化して限りなく拡散していく学問研究の底に不知不識のうちに醸成されていく非人間化を問い直し、真に人間における学問であり、人間を成就する研究であるということを明らかにするための具体的な方法として、総合という言葉を使うということであります。」

当時の大谷大学には文学部しかなく、現在のように社会学部、教育学部、国際学部は存在しなかった。しかし、社会学部の前身となった文学部社会学科はすでに存在していたし、現在も存続する真宗学科、仏教学科、哲学科、史学科（現在の歴史学科）、文学科があった。また短期大学部には仏教科、国文科、幼児教育科が置かれていた。文学部のみの単科大学とはいえ、すでに多様な学びが展開されていた。そのような状況を「特殊化し個別化して限りなく拡散していく学問研究」と表し、大谷大学におけるすべての学問研究に共通する心得として「真に人間における学問であり、人間を成就する研究である」ことを強調した。そして、その願いを「総合」という言葉で表現したのである。

このすべての学問分野に通底する心得として思い浮かぶのは、正門横に建てられている「知進守退」の石碑である。仏教の学びを進めながらも、それを己のためだけのものにするのではなく、学びの成果を人々のために生かしていくべきだと説いているのである。1901（明治34）年に大谷大学が真宗大学として東京の巣鴨に開学した際に建てられた。その石碑が京都に移転した際に運ばれて今でも大谷大学での学びの座右の銘となっている。

「知進守退」が説く学問への姿勢が、当時の廣瀬学長のいう「総合」という言葉と通じるように思えるのである。すなわち、いかに学問が専門分化したとしても、それが人間成就のためであり研究者個人の満足にとどまらず、広く人々のためにあるのだということを研究所の名前に「総合」とつけて表した。現在の大谷大学は複数学部化してさらに様々な学問分野が展開している。研究所発足時にはなかった教育学部と社会学部が2018（平成30）年に発足し、その3年後の2021（令和3）年には国際学部も新設された。2000（平成12）年に文学部に開設された人文情報学科は2018年に発展的解消ののち、主に社会学部の情報教育と研究に引き継がれている。教育学部には数理教育専攻が置かれて数学の先生が在籍しているし、初等教育コースには理科教育の先生もいる。そして私自身も専門は地質学で、文理融合の文化地質学を発展させてきた。

これら様々な学問分野のすべてに通底するのが「知進守退」であり真宗総合研究所の「総合」なのだ。したがって、真宗総合研究所は大谷大学で研究をするすべての学問分野の研究者に開かれた研究所でありながらも、決して自己保身のための研究や人を傷つける戦争兵器やサイバー攻撃の研究など、非人間化へと進む研究をしてはならない。

しかしながら、最近の真宗総合研究所のありようは、多くの研究者が訪れて研究交流がさかんに行われているようには見受けられない。開所時に掲げられた「総合」の意味を再び問い直し、大谷大学での学問研究が活性化するように真宗総合研究所の新たな展開を模索する必要がある。学長主導の特定研究、指定研究はもちろんのことながらも、あらゆる研究者が集い、交流し、お互いに刺激しあう研究所を目指して改革を進めていきたい。

2025（令和 7）年度「指定研究」等研究成果報告

特定研究「大谷大学樹立の精神」100 年

佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる

研究代表者・教授　一楽 真
（真宗学）

大正時代、1918（大正 7）年に「大学令」が出され、帝国大学以外の公立・私立の大学が認められることとなった。大谷大学は 1922（大正 11）年に大学令による大学として認可されているから、いち早く認可を受けた大学の一つである。そして、校名も「真宗大谷大学」から「大谷大学」へと改めた。その大谷大学が誕生した 2 年後の 1924 年に第 3 代学長に就任した佐々木月樵は、翌 1925（大正 14）年 5 月 1 日の入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」という講演をおこない、大学令に基づく大谷大学としての使命を述べる。この佐々木のことばは、初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と併せて、本学の建学の精神を表明したものとして位置づけられている。

2025 年はまさに「大谷大学樹立の精神」が発表されてから 100 年という節目であり、「大谷大学樹立の精神」に込められた佐々木月樵の願いをあらためて確かめていくことが本研究班の目的である。

この目的を達成するためには、まず佐々木の生涯や著述活動の全体像を把握することが必須となる。佐々木月樵の著作に関しては、すでに『佐々木月樵全集』（全 6 巻）にまとめられているが、そこに収載されているものは著作などのごく一部であり、論文やエッセイ等の収載されていないものが多く残されている。

本研究班では、『佐々木月樵全集』に収められていない著作について、それらを収集してデータ化し、その一つひとつについて校正・読解・検討する作業から始めた。幸いなことには、すでに 2006 年度「大学史研究班」によって佐々木に関する文献はかなり収集されており、そのリストも残されている（そのリストによれば、592 点の論文・エッセイなどが確認できる）。本研究班においては、まず「大学史研究班」によって作成されたリストをあらためて精査・整理し、収集されていない文献についてはそれらを収集し、すでに収集されている文献については文字起こし・データ化して校正していく作業をおこなってきた。

これによって、文字起こし・データ化についてはほぼ終えることができた。また、定期的に開催していた研究会において、各論文・エッセイに関する校正と読解をおこない、その中の約 40 点の文献に校正が及んでいる状況である。

また当初より課題でもあったが、特に 2024 年度から、佐々木の文章の初出雑誌と、それらのいくつかが集成されて一冊の著作として刊行され、さらに佐々木没後に全集になっていくという過程について、その変遷過程の調査にも着手した。たとえば、初出原稿と、著書の間に、佐々木の手が加わっているのかどうか、どの程度加わっているのかということなど、特に RA を中心に前後の関係を調べてきた。但しこの調査は、部分的に訂正や加筆が加わっているものであれば、その関係を見出すことは比較的容易であるが、題目を含め大幅に改められている場合もあり、それらの佐々木の編集過程を詳細に見ていくことは容易ではなく、難航した。

本研究班では、「樹立の精神」100 周年となる 2025 年度に、学内外の有識者による公開研究会を開催することが大きな目的としてあった。幸い学内関係部署や学外有識者の理解と協力を得て、2025 年 10 月 11 日の本学・開学記念式典の午後、「樹立の精神」100 年記念公開研究会を開催することができた。2 名の有識者に登壇いただき、佐々木の人物像や業績、そして仏教・真宗に対する着眼点や研究手法について提題をいただくことができた。本研究会の報告は、2026 年度に刊行される『真宗総合研究所研究紀要』に掲載する予定である。

また本研究班では、研究成果の一部として佐々木の著述目録も公開する予定である。これはすでに刊行されている大谷大学編『大谷大学樹立の精神』（1975 年）所収の「佐々木月樵先生著述目録」をもとに、さらにその後の 2006 年度「大学史研究班」によって整理されたリストをも参考にし、これらを本研究班によってあらたに修正・更新した著述目録となる。これも前述の『真宗総合研究所研究紀要』において「資料集」として公表することを目指している。

国際仏教研究

国際的な仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　木越 康
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

仏教学・宗教学の分野における国際化は新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受けた後も、研究活動の形態は多様化しているが、2023年度から、新たな体制のもと、国際仏教研究が古くから取り組んできた「受信」と「発信」の役割を果たし続けている。2025年度はその3年計画の最終年度に当たる。2025年度の研究活動は以下の4点に集約することができる。

①国際学会・ワークショップへの研究員派遣

従来、取り組んできた『歎異抄』翻訳研究ワークショップのプロジェクトに関するワークショップの開催と参加に加えて、二つの国際学会に研究員を派遣した。

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』翻訳研究ワークショップを継続的に開催した。2025年度は、以下の2回のワークショップが実施された。

1）第15回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
　2025年6月27日㈮～29日㈰大谷大学
2）第16回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
　2026年3月6日㈮～8日㈰カリフォルニア大学バークレー校（会場は浄土真宗センター）

第16回のワークショップの詳細については、本所報掲載の参加報告を参照。翻訳作業が進んでおり、英訳している三つの注釈書の下訳がほぼ完成している。

2025年8月24日㈰から30日㈯までポーランドのクラコフ市にあるヤギェロン大学を会場に世界宗教学・宗教史学会（International Association for the History of Religions）の第23回大会にマイケル・コンウェイ研究員を派遣し、「Reimagining Religion, Rethinking Philosophy: Theories and Methods from Buddhist Sources（宗教の再想像と哲学の再考：仏教典籍からの理論と手法）」と題するパネルで下記の題目の発表を行った。

Can *Jiao* 教　Be Translated As "Religion"? A Perspective from China at the Close of the Northern Zhou Dynasty（「教」は「宗教」として翻訳できるか？－北周末の中国が提示する視点－）

9月1日㈪から3日㈬に開催された国際真宗学会のヨーロッパ大会に2名の研究員を派遣し、下記の題目で研究発表を行った。

木越康研究代表者「"Peace and Harmony" realized by 'other-power' －Through Ryūkan's thought－」（他力によって実現される平安と調和－隆寛の思想を通して－）

マイケル・コンウェイ研究員「Was Daochuo Drafted in His Youth? A Consideration of How His Experience of War Influenced His Prioritization of Pure Land Buddhism」（道綽は若い時分で徴兵されたか－彼の戦争体験が浄土教の選択に及ぼした影響に関する一考察－

②国際シンポジウム成果出版の準備

2023年12月15日㈮～17日㈰に本学を会場に"Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions"（世界の宗教的伝統におけるさとりと知恵と変容）をテーマとするシンポジウムの成果出版に向けた準備を行った。シンポジウムにおいて世界各国から約30名の研究者を招聘し、研究発表と討議を行ったが、2025年度には、その成果出版の形態について議論を重ね、執筆者に詳細な依頼を出したと共に、出版社の選定について情報収集を続けた。

③「女性と仏教」に関する国際的研究の継続

「女性と仏教」をテーマとする国際的な研究を収集し、データベースの構築を継続したと共に、そのテーマについて研究を続けている者との関係を開拓し、2019年度のワークショップに続くさらなるワークショップの開催に向けて準備を整え続けた。

④Shinshu Center of America の英訳事業への協力

金子大榮師の『浄土の観念』の英訳プロジェクトのために、2026年3月9日㈪と10日㈫に真宗大谷派のロスアンゼルス別院にて、アメリカ真宗センターの出版担当者と、出版に向けた詳細な打ち合わせを行った。編集作業の内容およびスケジュール、本のデザインや、柱、扉等の詳細を定めた。

東アジア・北アジア仏教研究

仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築

研究代表者・教授　松川 節
（人文情報学・東洋史学）

本研究は、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、アジアにおける仏教研究の動向を把握するとともに、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進することを目的とし、2025 年度は次の 2 つの研究活動を行った。

①中国社会科学院古代史研究所との共同研究

2015 年 12 月に開催された「中国古代史および敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果論文集（総頁数 68 頁）を出版した。本書の構成は以下の通りである：

序文（松川節研究代表者）
王震中「中国国家形態構造の進化と民族類型との関係」
江村治樹「中国新石器時代の都市発達をめぐる諸問題」
牛来穎「大谷馬政文書と『厩牧令』研究－進馬文書を切り口として－」
李錦綉「「移隷葱嶺」と唐代の西域経営」
雷聞「唐代の郷官と老人――大谷文書 4026「郷官名簿」を手がかりに」
黄正建「大谷占卜文書の研究（その 1）――敦煌占卜文書との比較を兼ねて――」
楊宝玉「大中 5 年張議潭入奏の諸問題についての分析――杏雨書屋蔵羽 032-1『駅程記』を中心に」
赤尾栄慶「大谷大学所蔵敦煌写経私見――書誌学的観点から――」

②国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝」の開催と論文集の出版

2025 年 11 月 30 日、大谷大学において国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝」が開催された。本シンポジウムは、大谷大学真宗総合研究所指定研究「東アジア・北アジア仏教研究班」が 2023～2025 年度に実施した三年間の国際共同研究プロジェクトの最終成果報告として開催されたもので、ロシア、モンゴル、中国、日本の研究者が参加した。ロシア・サンクトペテルブルクのアンドレイ・テレンティエフは「梅檀仏」概念の再検討を行い、モンゴル国立大学のソドノムドルジ・ヤンジンスレンはモンゴル語文献に見える梅檀仏関係著作を分析した。また、中国社会科学院のチンゲルは清代における梅檀仏信仰を論じ、ガンダン寺学術文化研究所のノロブツェデン・アムガランはモンゴルにおける梅檀仏信仰の展開を報告した。日本側からは、藤原崇人（龍谷大学）が金元時代の梅檀仏信仰を、本井牧子（京都府立大学）が嵯峨清涼寺「釈迦堂縁起」と日本における梅檀仏信仰を論じた。各報告はモンゴル語、英語、日本語でなされ、報告内容は三言語に翻訳されて机上配布された。また、各報告それぞれに対して予めコメンテーターを指名し、コメントも三言語に翻訳して机上配布し、円滑な相互理解を目指した。結果として、東アジア・北アジアにおける仏教文化交流の実態と梅檀仏信仰の広域的展開が明らかにされた。

これらの成果は、国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝」論文集として出版された（総頁数 200 頁）。本書の構成は以下の通りである：

はじめに（松川節）
ご挨拶（鈴木寿志）
01 The ‘Sandalwood Lord’ Revisited（Andrei Terentyev）
02 An Analysis of Certain Works on the Sandalwood Buddha Written by Mongols（Sodnomdorj Yanjinsüren）
03 清代における梅檀仏信仰（チンゲル）
04 Монгол оронд дэлгэрсэн Зандан зуу бурхны шүтлэг（Норовцэдэнгийн Амгалан）
05 金元時代の梅檀仏信仰（藤原崇人）
06 日本における梅檀仏信仰－嵯峨清涼寺蔵『釈迦堂縁起』を中心として－（本井牧子）
07『梅檀仏の伝説および巡礼の回数と利益を要約した宝珠』（テキスト）（アリルディー・ボルマー）
08 Appendix: Some Memories of the Trip to Egetui Datsan in 1995（Maria L. Menshikova）

大学史研究

大学史関係資料の収集・整理・管理・保管・研究および清沢満之研究

研究代表者・教授　釆睪 晃
（仏教学）

本研究は、【大学史関係資料研究】と【清沢満之研究】とに大きく分かれる。また、活動も、基本的には 2 班に分かれて行った。以下、【大学史関係資料研究】と【清沢満之研究】とに分けて記す。

【大学史関係資料研究】

ミーティングを重ねて、主に「大学史に関わる資料の収集・管理・保管体制のルール、方法の検討」に取り組んだ。昨年度は、大学史資料にかかわるチェックリストを作成した。しかし、2025 年度に検討を進めていくうちに、むしろ、研究班として確認すべきなのは最低限のものに留めてでも、大谷大学に関わった人たちがどのような人物であったかを示すものを収集した方が良いとの意見が提出された。理由は、次の 2 点である。①開講科目表、シラバス等の基幹資料は、既に担当部署によって収集されていること。②近年の他大学の周年史編纂状況を鑑みるに、大学の枠組の変遷を辿るのみならず、どのような人物が大学関係者としていたのかを描き出す方に重点が置かれつつあるという点である。ここに「大学関係者云々」というのは、どの教員がどういった授業を担当したかということのみならず、学生がどのような活動をしていたのか、周辺地域の店舗との交流など、かなり広汎なものを指す。

以上を踏まえて、以下のように方針を定めた。①基幹資料（データ）については、引き続きその優先順位等を検討していく。②大谷大学の雰囲気を伝えるものとして、既に大学が発行しているもの（『広報』『通信』『無盡燈』『キャンパスライフ』『じんげんアジール』など）に、どのような記事があるかを確認していく。「キャンパスメモランダム」や「仏教伝来」は、既に冊子化されて図書館に収められているが、他にも大学教員や関係者の人柄を感じさせるものが収められている。これらを確認していく。まずは、『大谷大学広報』で、1978（昭和 53）年～1989（平成元）年に連載された「谷大人物誌」をデータ化した。③2031 年の開学 130 周年に何らかの成果を出せるようにする。

【清沢満之研究】

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進める上で、重要な意義をもつ西方寺所蔵文献についての研究とその公開に向けた研究に取り組んでいる。

具体的には、次の 2 点を柱として研究活動を行っている。

1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究

2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして 36 枚撮りフィルム 167 本分、総文字数 3,703,420 字である。その中には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができる。2021 年度から 2023 年度までに、その全体について、分野、内容、執筆年代等の基礎的な確認・検討を行い、その全貌について精査する研究を進めた。具体的には、全文献の簡易な解題と文献ごとの目次を作成し、分野の確定と内容の確認を行った。また、執筆年代が確定できた文献については、『全集』第 9 巻に収録する清沢満之の年譜に、その情報を加えていく作業を行った。また、3 カ年の活動開始当初は予定していなかったが、『全集』収録・未収録を写真一枚ごとに明確にするリストの作成も完了している。これら 3 カ年の研究成果を踏まえ、2024 年度には追加的な検討を加えたうえで、その成果の一部を本研究所『紀要』第 42 号（2025 年 3 月）で公開し、さらに解題を含む文献リストについては、『西方寺所蔵清沢満之自筆原稿調査目録』（2025 年 3 月）として冊子にて限定公開した。

2025 年度は、この目録に基づいて、優先的に公開すべき資料を選定し、選定された資料（具体的には F103-F106、F054-F059）について校正および内容精査の作業を進めた。また、当該目録の追加的調査により、目録の一部に修正すべき点があることが判明したため、修正作業を行った。また、外部からの情報提供により、清沢満之の未発表の書簡 1 点を収集した。

以上はあくまで基礎的研究であり、公開へ向けてはその確度を上げていく研究が、次の段階として必要となる。その研究を踏まえた上で、公開可能な文献は、順次、研究所の機関誌等で公開していくことを目標とする。これらの研究であきらかにした成果については、これまで同様に西方寺と情報共有を行っていく。また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集する活動も継続していく。

仏教写本研究

仏教写本の総合的研究

研究代表者・教授　DASH Shobha Rani
（仏教学・写本学）

大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その中には、1900年にタイ王室から寄贈されたと思われる東南アジア諸文字によるパーリ語貝葉写本群が含まれており、これは日本最大級の規模を誇るとされ、研究者から注目を集めている。

本研究の主な目的は、これらの写本の保存・整理、利活用の促進、および学術研究に資する基盤の整備にある。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、データベース構築、包み布の調査、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に研究を推進し、その実現に必要な資料の収集も併せて行う。さらに、写本研究を基盤として、南アジア・東南アジアを中心に、その文字、言語、文化、信仰などに関する国際的・学際的な研究を展開するとともに、関連資料の継続的な収集、共同研究や研究ネットワークの構築を目指すことも目的としている。

このような目的の達成に向けて、2025年度は以下の研究活動を実施した。

①写本の整理・ローマ字転写テキスト作成：2023年12月に、本学の関係部署より、クメール文字の一部の貝葉写本について、ローマ字転写テキスト（Diplomatic Edition）の刊行および公開の許可が正式に下りた。これを受け、当該写本の画像データの整理を行い、文字入力や写本の内容の整理などの作業がより具体的に開始した。2025年度も引き続きこれらの作業に取り組み、ローマ字転写、出版レイアウトの確認作業などが完了した。完成した転写テキストのデータは、今後研究資料として利用しやすい形式で研究者に提供する予定である。また、2026年3月19日～31日にかけてタイへの調査出張を実施し、本研究所との協定機関の Dhammachai Institute を訪問した。現地では、本班嘱託研究員の Suchada Srisetthaworakul 博士およびその他複数名のネイティブの研究者の協力を得て、当該写本の確認作業及びバリアント作成の準備を行った。（タイの調査出張の詳細については、本『研究所報』の32-33、35-36ページを参照。）

②データベース構築：大谷大学図書館により1995年に刊行された『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』（以下、『大谷貝葉目録』）は、本学所蔵の東南アジア諸文字を使用したパーリ語仏教写本の詳細な目録である。本研究では、その利便性向上を目的として、Excel 形式によるデータ化を行い、すでに完了している。さらに、2023年12月には、本目録の英語版のデータベース公開の許可が下りたことを受け、2025年度もその実現に向けた作業を継続して行った。英訳および Web 公開に向けての技術的準備は、現時点で概ね完了している状態である。

③大阪万博展示への協力：本学は、インド政府からの正式な依頼を受け、2025年4月13日から10月13日まで開催された大阪・関西万博のインド館「バーラト」（Bharat）に協力することとなった。それに伴い、本班は、展示内容や説明文の作成、公開講演会およびワークショップの実施などを担当し、仏教写本に関する知見の一部を広く一般社会へ還元すべく、多面的に協力した。（詳細については『研究所報』第87号、41–42頁を参照。）

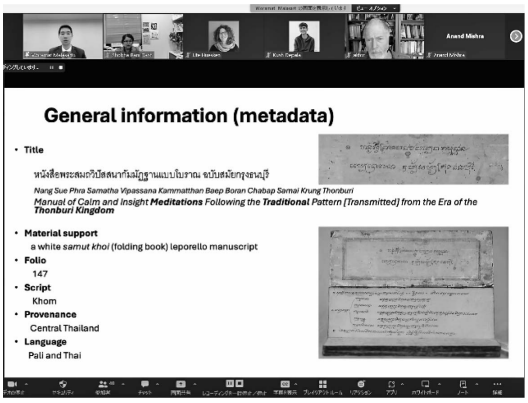
④写本における使用文字の精査：『大谷貝葉目録』所載の一部の写本について継続的に使用文字の確認作業を行った結果、使用文字の記載に誤りがあることが明らかとなった。その詳細については、別途公表する予定である。

⑤ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究：写本研究における総合的かつ先進的な学術的探究および技術・知見の集積を目的として、2021年度よりハイデルベルク大学南アジア文化・宗教史学科（Department of Cultural and Religious History of South Asia）と連携し、「Manuscriptology and Digital Humanities」という共同研究プロジェクトを立ち上げた。

このプロジェクトのもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催しており、2025年度は Zoom を用いたオンライン形式で計5回の研究会を実施した。これにより、本プロジェクトのもとで開催された共同研究会は、2025年度までに計30回に達した。

○第1回公開講演会
題　名：From Manuscripts to Networks
発表者：Dr. Charles Li
（Universität Hamburg）
○第2回・第3回公開講演会
題　名：Digitally Conserving Bengaluru's Stone Inscriptions: Technology, Data, and Public History - How 3D Scanning, Data Science, and Citizen Collaboration Are Reshaping Epigra-

phy（1）・（2）
発表者：Udaya Kumar P. L.
（Honorary Project Director,
Bengaluru Inscriptions 3D Digital Conservation Project Mythic Society）
○第 4 回公開講演会
題　名：Transforming Text into Image: A Study of an Illustrated Traditional Kammaṭṭhāna（Meditation）Manuscript from 19th-Century Thailand
発表者：Dr. Woramat Malasart
（JSPS Postdoctoral Fellow,
Otani University, Kyoto）
○第 5 回公開講演会
題　名：Towards Imagining Universal Access to Textual Knowledge SAMHiTA: Building an Open-access Digital Repository of South Asian Manuscripts
発表者：Sudha Gopalakrishnan
（Project Director, SAMHiTA and Executive Director, IIC-International Research Division）



第 4 回公開講演会のオンライン発表の様子

これらの講演の詳細について https://www.otani.ac.jp/cri/cmnkvm0000007krj.html（大谷大学）；https://www.sai.uni-heidelberg.de/en/departments-and-branches/cultural-and-religious-history-of-south-asia-classical-indology/research/manuscriptology-and-digital-humanities（ハイデルベルク大学）を参照されたい。

⑥国際ネットワークの構築：上述のように、仏教を基盤とした国際的な研究ネットワークの構築と交流は、本研究班の研究目的の一つである。これまで複数回にわたり、タイ・ナコンパトムに所在するマヒドン大学の宗教学部を訪問し、研究者たちとの意見交換を重ねてきた。こうした継続的な学術交流を通じて、2026 年 3 月には大谷大学とマヒドン大学との間で学術交流協定が締結された。詳細については、https://www.otani.ac.jp/news/2025/lg8c9g0000002sim.html（大 谷 大 学）；https://www.facebook.com/share/p/1DYP6AER8h/（Mahidol University College of Religious Studies）を参照されたい。

また、2025 年 11 月の調査の際には、バンコクの仏教専門テレビチャンネル WBTV よりゲストとして招かれ、取材を受けた。



⑦『大谷貝葉目録』の修正：『大谷貝葉目録』は刊行からすでに相当の年月が経過しているため、その間に蓄積された研究成果や新たに得られた情報に基づき、目録内容の再検討および修正を随時行っている。

⑧資料・情報収集：Dhammachai Institute の協力のもと、東南アジアの仏教写本に関する多くの情報を継続的に収集している。今後、これらの情報を整理・分析し、仏教写本の諸相を明らかにした形での刊行を予定している。

チベット文献研究

大谷大学所蔵チベット語文献の研究

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

（1）蔵外 no.12767：『聖大集目連菩薩救母経（*'Phags pa 'dus pa chen po byang chub sems dpa' mo'u 'gal gyi bus ma la phan btags pa'i mdo*）』（写本・127 葉）の研究

本経は、目連が地獄に堕ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容としている。「経」と題され、冒頭にサンスクリット語タイトルをチベット語タイトルと併記する点や、奥書に翻訳者名が記されている点から、テキスト自身はサンスクリット語からの翻訳経典であることを主張している。しかしながら、（a）冒頭のサンスクリット語タイトルとチベット語タイトルが一致しないこと、（b）奥書に記される二人の翻訳者（Vidyākarasiṃha と Ye shes sde）の年代が一致しないこと、さらに（c）全 28 章のうち第 1 章から第 4 章までの内容が『宝星陀羅尼経』の冒頭部と一致することなどから、本経は翻訳経典ではなく、チベットにおいて成立した「チベット撰述経典」であると考えられる。

また、同内容のテキストは国外の研究機関にごくわずかしか確認されておらず、本学所蔵本は極めて貴重な資料であるといえる。本研究では、国外所蔵本が未公開である現状を踏まえ、本経の公開を目指して校訂作業を進めている。その一環として、2025 年度には校訂テキスト刊行の準備を進め、第 5 章から最終第 28 章までの校訂を行った。

その過程で、この写本が持ついくつかの特徴的な表記法が確認された。例えば、次の語句については、一貫して通常とは異なる綴りが用いられている。

	本経での表記		通常の綴り
閻魔王	gshin rje	→	gshen rje
光明	'od gzer	→	'od zer
いつでも	nams kyang	→	nam yang
神変	chos 'phrul	→	cho 'phrul
餓鬼	yid dwags	→	yi dwags

また、「chu gang（勇気）」のような古い語彙も見られる。

先述の通り、第 1 章から第 4 章については、その内容が一致する『宝星陀羅尼経』（Kurumiya Yenshu, *'Dus pa chen po rin po che tog gi gzuṅs*: *'Dus pa chen po dkon mchog dbal zes bya ba'i gzuṅs*: *Being the Tibetan Translation of the Ratnaketuparivarta*. Kyoto: Heirakuji-Shoten, 1979）との対校によって、テキストの修正を行うことが可能であった。しかし、第 5 章以降については対校可能な写本・版本が確認できない。そこで、対校資料とすることができる同様の文例が他に存在しないか、ウィーン大学の Resources for Kanjur and Tanjur Studies（rKTS）および Buddhist Digital Resource Center（BDRC）が提供するチベット語テキスト・データベースを参照・確認しつつ校訂作業を進めた。その結果、第 25 章の「de'i tshe tshe dang ldan pa ... mthong bar gyur to /」（96b4-102a4）の箇所については、『秘密如来経』（*De bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*. D47, 135b4-138a6; P760-3, 155a7-158b6）にほぼ同文の箇所が存在することが確認された。

ただし、両者は完全に一致するわけではなく、本経ではその内容に合わせて新たな句が付加されている。例えば、『秘密如来経』において「〔目連よ〕汝は、如来の無量の音声輪を知りたいと望んでこの世間に来たが（khyod de bzhin gshegs pa gsung dbyangs tshad med pa'i gsung gi dkyil 'khor shes par 'dod pas / 'jig rten gyi khams 'dir phyin gyi /）」（D47, 137a2-3; P760-3, 157a8）とある箇所は、本経では「〔目連よ〕汝は、如来の無量の音声を知りたいと望み、母を見たいと思ってこの世間に来たが（khyod de bzhin gshegs pa gsungs dbyangs tshad med pa shes pa 'dod pa dang / ma mthong bar 'dod pa nas 'jig rten gyi khams 'dir phyin gyi /）」（99b2-3）となっている。このように、本経では目連による救母説話という主題に合わせ、「母を利益する方法」「母を見たいと思って」「母を探して」といった句が各所に付加されていることが確認できる。同様の姿勢が、本経冒頭の第 1 章から第 4 章までの『宝星陀羅尼経』と重複する部分においても見られることは、既に昨年度の研究報告で指摘したとおりである（所報 No.86: p.8 参照）。

また、115b5-119a3 の一部の文については、『弥勒獅子吼経』（*Byams pa'i seng ge'i sgra chen po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*. D67; P760-23）に同文が見られることも確認された。こうした平行テキストが存在する箇所については、それらを参照しつつ校訂を行ったが、それ以外の箇所については対校資料を欠くため、誤写と判断される綴りについては校訂者の判断によって修正を加えざるを得なかった。

加えて、句の脱落が疑われる箇所も存在する。例え

ば、餓鬼道に堕ちた母を救済した目連に対する諸天の賞賛偈は、「それゆえ汝をよく賞賛することにより（de bas khyod la rab tu bsngags pa yis //）」（85b4）という未完結な句で終わった直後に、話題転換を示す接続詞「それから（de nas）」が続いている。「bsngags pa yis」を「bsngags pa yin（賞賛するのである）」の誤記とみなすことも可能ではあるが、何らかの句が脱落している可能性も考えられる。ただし、対校し得る資料が存在しないため、いずれとも断定し難い。

以上のように、本経の校訂作業は多くの困難を伴うものであり、なお再検討を要する箇所が数多く残されている。それゆえ、2025 年度中にその校訂テキスト刊行を完成させることができなかった。

（2）蔵外　no.11841『プトン仏教史』の翻訳研究

14 世紀チベットを代表する学者プトン・リンチェンドゥプ（Bu ston Rin chen grub, 1290-1364）により著された『善逝教明示仏教史大宝蔵論（bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod）』通称『プトン仏教史』の第 1 章仏教概説の部分の和訳研究である。この研究では、2022 年に本研究班が公刊した校訂テキスト（Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Tibetan Works Research Project, *Bu ston's Introduction to Buddhism: a Critical Edition of First Chapter of the Bu ston chos 'byung*. Kyoto: Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, 2022）に基づいて和訳研究を行う。本研究は嘱託研究員の上野牧生准教授によって行われた。2025 年度は、第 1 章第 2 節「聴聞すべき・解説すべき法とは何かを確認すること」のうち〔釈尊の〕御言（bka'）の定義と語源を述べる箇所（校訂テキストの pp.56.6-64.3）の訳註を『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』（43）に発表した。

（3）『モンゴル仏教史』の翻訳研究

この研究では、2019 年に本研究班が刊行したイェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』（寺本婉雅旧蔵）を、モンゴル語版と対照した上で、詳細な注を付した和訳研究を行う。訳注の作成にあたっては、本仏教史に先行するモンゴル語年代記『蒙古源流』（17 世紀）、チベット語仏教史『パクサムジョンサン（*dPag bsam ljon bzang*）』『ホルチョエジュン（*Hor chos 'byung*）』に加え、明朝側史料やペルシャ語資料などに基づいた最新の歴史学の成果を参照している。本研究は嘱託研究員の伴真一朗氏によって行われた。2025 年度は、北元の歴史と北元の歴代ハーンの系譜について述べた 9b6-11b4 の訳註を『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』（43）に発表した。

宗教・社会研究

宗教と社会の関係をめぐる総合的研究 －社会的なものとしての宗教－

研究代表者・准教授　後藤 晴子
（社会学・文化人類学・民俗学）

はじめに

多様な価値観を内包する現代社会において、様々な変化を強いられるなか、宗教のあり方もまた問われている。本研究では、そうした現代社会が内包する諸課題について、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的としている。2025 年度は、前年度に引き続き「社会的なものとしての宗教」をサブテーマとして掲げ、現代社会における宗教の役割の解明を念頭において課題に取り組んだ。

以下、具体的な取り組みと成果を概観する。各活動の詳細については、本号および前号に掲載されている研究員による報告を合わせてご覧いただきたい。

2025 年度の活動概要

本研究は、大きく分けると異なるふたつのアプローチで実施している。ひとつは①各研究員が各自のディシプリンを生かしながら研究課題へと接近する取り組み、もうひとつは②室長が主導し全研究員が協働しながら実施する取り組みである。

①の取り組みには、(1) 各研究員を代表とする研究班の取り組みと、(2) 共同課題の検討を目的に各自の専門を生かしつつ、研究員が中心的に企画を担当し実施する公開研究会などがある。

まず (1) として年度初めに、各研究員が各自の研究について発表し、意見交換する機会を設けた。また年度末には東京分室 PD 研究員個人研究成果報告会を開催し、各研究員がそれぞれ研究発表を実施した（2026 年 3 月 3 日　於：大谷大学響流館マルチディア演習室、対面開催）。本研究会は普段は東京を拠点として活動する各研究員が、年間を通した研究活動の一端を報告し、学内の教員に助言を仰ぐ貴重な機会である。2025 年度は研究発表で統一し、当日は一楽学長や鈴木所長、箕浦主事をはじめとする教職員が参加し、限られた時間ではあったが分野を超えた活発な議論が交わされた。

(2) として 2025 年度は、科研費基盤研究 (C)「近代日本の宗教思想における女性性の意味と役割：一燈園西田天香新資料をベースにして」(23K00079) との共催公開研究会を 1 回、東京分室単独で開催した公開研究会 2 回に加え、新たな試みとして南山大学・南山宗教文化研究所、同朋大学・仏教文化研究所とともに三研究所若手研究員合同研究会を 1 回実施した。

まず、共催で開催した公開研究会「一燈園研究のこれから－近代宗教史における一燈園の諸相」では、藤井麻央研究員が中心となって実施した（2026 年 3 月 9 日、於：関西大学東京センター、ハイブリット開催）。本研究会は、宗教学、宗教哲学、歴史学などの立場で近代日本を専門とする研究者が、それぞれの学的営みの途上で出会った一燈園や天香について考察し、新たな光のもとでその輪郭を明らかにすることを試みることを目的として実施。第一部は科研側が企画を担当し、科研の代表者である水野友晴氏（関西大学）の司会のもと大澤絢子氏（東北大学）の講演、長舩樹氏（同志社大学大学院）による翻刻報告、大橋良介氏（日独文化研究所）のコメントが実施された。第二部は藤井研究員を中心に分室が企画を担当し、シンポジウム形式で実施。藤井研究員、末村正代氏（千葉経済大学）、長谷川怜氏（皇學館大学）がそれぞれの立場から運動的な視点から社会における一燈園の拡散する状況を捉えることを試み、近代宗教史における一燈園の展開を考察し、永岡崇氏（駒澤大学）がコメンテーターを務めた。当日はオンラインを含め 50 人ほどの参加があり、学識者だけでなく一般参加も複数あり、「修養」というキーワードへの社会の高い関心が窺えた。また本企画は 2024 年に藤井麻央研究員がパネリストとして参加した同科研、「第 2 回　西田天香公開研究会　天香をめぐる人物たち－女性・宗教家・画家」（2024 年 12 月 21 日　於：一燈園総寮、ハイブリット開催）の共催協力に端を発していることも付記しておきたい。

次に、単独の公開研究会としては 2 回実施した。ひとつは前年度に鶴留正智研究員が中心となって企画を担当した「水俣と宗教」に関する 2 回の研究会企画を引き継ぎ、分室で企画した「被傷性への感受性－宗教研究者の戦争体験を踏まえて－」（2025 年 6 月 30 日、於：親鸞仏教センター 3 階会議室、ハイブリット開催）である（本会の詳細は、前号の所報 87 号を参照のこと）。本研究会では原爆投下という災禍に見舞われた長崎において長年フィールドワークを実施し、戦争死者慰霊について考察するとともに水俣についても論じておられる西村明氏（東京大学）を講師とし、他者の被傷性にどのように向き合うのかということを考える試みとして実施した。西村氏の調査研究というかたちで被傷性に向き合う宗像巌と脇本平也というふたりの宗教学者に関する考察は、自らの学問への向き合

い方を改めて考えさせられるものであり、講演後には参加者から活発な質疑が寄せられた。

もう一つは、高橋研究員が中心となって実施した「現代日本の地域寺院と外国人仏教徒－宗教空間における関係性の諸相－」（2025年12月15日、於：大谷大学響流館3階マルチメディア演習室、ハイブリット開催）である。本研究会は、四国地方・九州地方などを中心とした在日外国人の信仰と地域との関わりに関する業績を積み重ね、かつ自身も本願寺派僧侶として自坊で多文化共生に関する活動を続けておられる清藤隆春氏（北九州市立大学）を講師とし、在日外国人の信仰にどのように地域社会が向き合い得るかについて考察することを目的に実施した。講演では、多文化共生についての可能性と困難さが共有され、コメンテーターの本学社会学部・徳田剛氏からは地域寺院による社会活動の性質を捉え直す必要性が提示された。また参加者からも活発な質疑が行われた。

東京分室が2025年度新たな試みとして実施したのは、南山大学・宗教文化研究所、同朋大学・仏教文化研究所とともに若手研究員の交流を目的として実施した「三研究所若手研究員合同研究会～「宗教と社会」をテーマに～」（2025年11月22日、於：南山宗教文化研究所1階会議室、ハイブリット開催）である。本研究会は研究所・研究員相互の交流を目的としたものである。第1部ではPD研究員の活動を相互に紹介し、第2部では「宗教と社会」をテーマにそれぞれの研究所から1～2名が代表して研究発表を実施した。第1部では研究所ごとにそれぞれ特色のある活動が報告され分室の活動を考える上でも大変勉強になった。また東京分室の研究員による「共同研究」については、参加者からは意義深い試みであるとのコメントを頂いた。また第2部では、仏教学、宗教哲学、教育学、歴史学と専門は異なるものの、「宗教と社会」をテーマに発表が行われ、発表後は専門分野に捉われない、また所属学会等とは異なる充実した議論が交わされた。

最後に②の取り組みであるが、指定研究の研究課題を検討することを目的とし、昨年度から引き続き長崎県をフィールドとして現地調査を2回実施した（2025年9月1日～9月3日、2026年2月11日～13日）。

現地調査ではキリスト教や仏教、民間信仰が混在する長崎県上五島市、長崎市（外海界隈）、平戸市、佐世保市（黒島）、大村市において諸宗教と地域社会との関わりの実態を明らかにすることを目的とした。

1回目の調査では、主として上五島および長崎市近隣を対象とし、九州・沖縄の仏教史・真宗史に関する研究を進める福島栄寿教授（22K00085）と東本願寺沖縄別院・長谷暢輪番とともに共同で調査を実施した。1日目は早朝海路有川港に移動し、有川郷にある真宗大谷派・道光山憶念寺の住職・本庄禎正氏に地域寺院の社会的役割についてお話を伺い、北部の教会群の巡検を実施した。2日目は、カトリック鯛の浦教会で司祭に上五島の信仰状況ついてお話を伺った後桐教会などを巡検しながら奈良尾郷に移動し、真宗大谷派・虎星山真宗寺の住職・山本翔氏に門徒や他宗派との関わりについてお話を伺ったのち長崎市へ移動。3日目は、真宗大谷派信行寺住職・清原昌也氏の案内のもと長崎市やその周辺地域の大谷派寺院、キリシタン関連史跡、日本二十六聖人記念館、長崎市外海歴史民俗資料館などの資料館などを巡検した。

また2回目の長崎調査では、1日目は昨年度の調査をご縁にお声がけいただいた平戸市・宝亀教会の信徒方へのインタビュー調査と、平戸の民俗に関する「島の館」資料館の館長・中園成生先生によるレクチャーを実施。2日目は世界遺産の黒島教会で知られる佐世保市黒島、3日目は外海のキリシタンを政策的に五島へ移住させた旧大村藩のキリシタン関連史跡を中心に地元ガイドの案内のもと実施した。前年度に引き続き長崎調査を継続実施することで地域ごとに抱える問題や信仰のありようについて考察がさらに深まった。

おわりに

最後に東京分室長としての2年間を振り返りたい。当初は何もかもが手探りだったが研究員各氏と模索しながら、新たな試みもできたことを幸いに思う。ひとえに活動を温かく見守って頂いた一楽真学長、真宗総合研究所の廣川智貴前所長、鈴木寿志所長、箕浦暁雄主事をはじめとする真宗総合研究所の皆様、ご登壇いただいた先生方、ご参加いただいた方々、現地調査でご尽力いただいた関係各氏のご尽力の賜物であると感じている。関係各氏には、心からの感謝を申し上げたい。期せずして次年度も役目を継続することになったが新たな1年も研究員各氏とともに邁進したい。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

研究代表者・2025 年度室長・教授
箕浦 暁雄
（仏教学）

デジタル・アーカイブ資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化して、そのデータを整理・保管し、研究資料として公開することにある。

2025 年度の主な活動は、大谷大学図書館古典籍データベースの構築である。大谷大学図書館は、約 3 万部 14 万冊の古典籍資料を所蔵している。かつては、それら資料の検索には、その時々に編纂された『大谷大學圖書館和漢書分類目録』などの冊子目録が用いられてきた。2010 年度より、真宗総合研究所の事業の一環として、古典籍資料の書誌学データベース作成のためのデータ化作業を進めてきた。

書誌情報の採録作業は、綿密な調査を行いながら進め、さらに確認作業を行うという形で行ってきた。この古典籍データベース構築のデータ化作業には、資料名（内題）や著者標目を正確に採る必要があることは言うまでもないが、それに留まらず、その時点で調べられるかぎりの関連情報を付け加えてデータ化している。採取した項目をすべて公開しているわけではないが、作業者の高度な専門的知見によって、他に類を見ない古典籍データベースの構築作業を進めることができている。

2025 年度も引き続き書誌情報のデータ化作業を行い、2026 年 5 月 18 日現在、合計 21,765 件の書誌情報がデータ化されたことになる。これら古典籍資料の書誌情報データは、大谷大学図書館古典籍データーベース（試行版）として公開していて、昨年度も随時更新した。URL は次の通りである。

→https://bib.otani.ac.jp/cat/

なお、試行版とはいえ、データを公開していることで、外部からの資料閲覧の問い合わせを多く受けていて、広く研究者に資するものとなっている。今後もさらにデータベースの精度を高めるための作業を継続する予定である。

2025（令和7）年度「一般研究」（予備研究）研究成果報告

共同研究

伝統宗教の未来に関する総合的研究 －過疎地域関係多世代住民への 宗教動態調査から－

研究代表者・教授　木越 康
（真宗学）

日本の伝統的地域コミュニティでは、寺院や神社などの宗教施設が長くコミュニティ活動の中心的な役割を果たし、住民の精神文化を支える柱となってきた。しかし少子化と都市圏への人口集中によって過疎地域はコミュニティ解体の危機に瀕し、このような宗教伝統にも大きな影響が及ぶことが危惧されている。本研究は、地域の秩序形成と維持に重要な役割を果たしてきた「宗教」に注目し、過疎化やコミュニティ解体がもたらす影響を分析した上で、伝統宗教の未来継承の形を総合的に研究する。

この研究は、申請者を中心として2017年以来継続して行ってきた研究活動に基づくものである。当初から歴史学・宗教学・社会学・地域福祉学・宗教人類学・真宗学の多分野の研究者が協働で行ってきたが、今回の研究では、これまで調査の核としてきた過疎地域住民の宗教動態調査を拡充し、他出者の多世代住民への聞き取りを中心的に行うことにした。多分野研究者によるこれまでの調査分析に「多世代関係住民の声」という新たな視点を加え、伝統宗教の未来への継承を実現するためのプラットフォーム（議論のための土台と体制案）を提示することを目指したものである。

上記目的のもと、本研究班では調査対象地域を岐阜県揖斐川町春日地区に定めてきたが、今年度は「多世代関係住民の声」を収集するため、同地区からの移住者が多いと想定される近隣の池田町での調査を実施した。特に住民への聞き取り調査は、2020年度から2024年度にかけて科研基盤研究（C）で行ったアンケート調査から得られた協力者に対して行った。アンケートは池田町の真宗寺院の協力を得て、各寺院が池田町内に運営する幼稚園・保育園（学校法人野々村学園／コスモ幼稚園・社会福祉法人市橋保育園）の保護者に対してメールで行った。その際、春日地区からの他出子やその関係者に対して追加調査への協力依頼を行ったが、今回は、申し出てくださった方々に対する聞き取り調査となった。

以下に4名の方から行った聞き取り調査の内容を報告したい。はじめに藤元雅文研究員が9月12日の午前中に、ZOOMを使用して学内から行った調査である。協力者（女性30代）は、本研究が主要調査対象地とする春日地区からの他出子ではないが、幼少期を同地区近郊の揖斐川町で過ごした方であった。当研究班ではこれまでの聞き取りでは共通して、「宗教伝統の過去（思い出）・現状・未来への想い」を聞き取るが、同協力者は幼少期には真宗寺院を頻繁に訪れ、門徒が日常生活の勤行で大切にする「正信偈」も記憶していると語った。現在は真宗寺院が経営する幼稚園に子どもを通わせているが、そのことにも喜びを感じていると語った。木越および藤枝真研究員は同日対面で、3名の方に聞き取りを行った。はじめに池田町内在住の保育園職員の紹介で、春日地区に居住する80代の男性2名に聞き取りを行った。本来他出子への聞き取りが今年度調査の目的であるが、紹介者を含めた3名で、春日地区の宗教伝統の現状に関する聞き取りを行った。公民館を使用して行われた聞き取りは予定を超えて2時間以上に及んだが、住民の多くが転出し、地区にはほとんど子どもがいない現状にあって、宗教伝統の未来継承に関しておおいに危惧される状況が語られた。また当該2名の協力者への聞き取り後には、池田町の協力園で、別の協力者30代女性から聞き取りを行った。

計4名に対する聞き取りであったが、一様に「祭り」関連の行事には、地区を離れた他出子やその関係者の参加もあり、ほそぼそとではあるが現在も維持されている様子が語られた。しかし一方で、寺院活動に関してはほぼ維持されていないし、また意識もされていない様子が語られた。地区の祭りには、男子と女子それぞれに役割を担う特徴的な「踊り」が伝わるが、双方とも現在は地域外の子どもたちの参加によって、なんとか維持されているという。地域の住民からすれば、子ども世代から孫世代へと参加者は移行しているが、地域を離れた人々も、踊りなどの行事には参加するとのことであった。しかし寺院関連の行事に、それら他出子が戻る状況はまったく聞かれることがなかった。過疎地域の宗教伝統も、「寺院関連」と「祭り関連」では、現状について、したがって未来について、大きな違いがあることが明らかになった。今後はこの点について十分に注意を払い、さらに聞き取りと分析を進めていかなければならない。

個人研究

世代交代する西アフリカ社会における若者の未来と生活戦略 ー三ヵ国の Z 世代の比較からー

研究代表者・教授　田中 正隆
（社会学・社会人類学・アフリカ地域研究）

1990 年代に民主化をへたアフリカ諸国では、旧体制からの体制転換や政治アクターの世代交代が起こっている。グローバル化やメディア環境の発展など大きな変動期にありながら、担い手の若年層は政策論議に入れない待機状態におかれてきた。一方で、Z 世代は新たな情報機器を駆使して、地域やエスニック、国家を超えた海外の移民との交流にも活発である。本研究は、こうした「若者」が、政権の世代交代にともなって、社会変革を求めて胎動する姿を追った。対象地ベナンのタロン政権二期目によってインフラ整備が進み、都市部周辺でも経済、情報流通の環境が発展してきた。他方、草の根の「下から」の開発も見られ、地道な教育の整備が若者層の資格取得、留学、起業の機会をもたらした。農業分野でもエコロジー農業や新たな複合農業など、伝統的な自国消費作物や輸出志向の綿花栽培の経験を踏まえつつ、健康志向・付加価値型の農産品へ転換する試みは可能性があり、若者の参入（回帰）が推奨されていた。政府は entrepreneurship を奨励し、他者からの援助を待つだけでなく、自ら仕事を見つけて始めること、開発・発展も地域発、草の根発の活動を、積極的に評価して支援している。こうした産業面に対して、政権への批判的言論やメディアの活動は規制され、閉塞感が広がっている。現地でもこうした二側面に人々の反応が揺れている。市民のなかには混迷する民主主義よりも権威主義的政治を容認するものもいる。アバンスール、シャマユー、トラヴェルソなど、近年の政治哲学では、自由・民主主義のゆき過ぎが統治に抗したり機能不全になる危険を視野に議論を展開する。民主的な議論や対立が失われる、ポピュリズムや権威主義的リベラリズムが慎重に検討されている。調査資料はこうした理論動向から再検討される。2025 年 7 月 31 日から 8 月 25 日までベナンで現地調査を実施した。この知見をふまえて 2026 年からの科研費基盤研究 C を申請し、採択された。予備研究の主旨には合致したと考える。

2025（令和 7）年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

外国人支援における宗教に関する研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員　高橋 泉
（教育学）

本研究は、外国につながりのある人々への支援を中心とした社会課題における宗教の役割を検討するものである。2025 年度は、2024 年度に引き続き第 2 次世界大戦後に生じた、外国につながりのある戦災孤児支援における宗教組織の関与の実態について調査を実施した。具体的には、当時の支援における中心的組織となったカトリック横浜司教区の協力を全面的に得て、関係者への聞き取りや史料の解析を進めた。カトリック教会はローマ・カトリックを中心として全世界に教区制が敷かれており、我が国においても中央協議会や各教区における司教・司祭会議の定期的な遂行が伝統的慣習である。これらの組織体制は、組織が取り組む社会事業における諸問題の共有とその対処について、迅速な対応を促す機能を有していることが考えられ、本研究におけるカトリック・ネットワークによる支援についても、こうした通常時からの組織の体制が、国外のネットワークも含め全面的に機能した事例であったことが示唆された。さらに同事例における支援活動は、米軍基地内のプロテスタント関係者によっても実施された。なおプロテスタントの社会活動については、同一教派内の諸組織との連携やより広いプロテスタント・ネットワークといったものの影響も大きい。こうした点を踏まえると、本事例におけるプロテスタント・ネットワークは、各米軍基地における従軍チャプレン同士の横のつながりとして早期から機能した可能性が考えられた。これらの研究結果は 2025 年度第 1 回「宗教と社会貢献」研究会にて報告を行い、複数の研究者から貴重な意見や助言を頂くことができた。そして、「外国につながりのある戦災孤児とその支援－厚木基地周辺地域における宗教ネットワークを中心に－」として論文を公開している（『宗教と社会貢献』第 15 巻第 2 号、1-20 頁）。

また上記の調査に並行して、2025 年度は特に在日韓国人コミュニティへの調査を進めた。このうち在日韓国人組織の一つである、ある宗教教団への調査においては、戦後国内各地への積極的な布教を展開し、日本国内における教勢の拡大に努めてきた組織の様子がうかがわれた。こうした実態からは、日本における信者獲得を目的とした在日韓国人宗教組織が、母国における宗教的基盤からの支援を受けて全国に拡大し、戦略的に拠点設立における土地取得に関する手続きを進めてきたことが考えられた。とりわけ日本人信者は、組織運営や会堂建築における法令上の手続きなど実務上の役割を果たすケースが確認されている。一方、組織の構成員は多数が在日外国人であり、ある種のマイノリティ性を帯びている。こうした在日外国人組織の特徴として、一つは組織がコミュニティ内の相互扶助や移住先におけるセーフティーネットとしての機能を有していることである。二つ目には、組織が母語や文化の継承拠点となることで、在日外国人のアイデンティティの保持に機能している点である。実際に組織内の活動においては、母語での宗教実践や次世代への宗教教育が行われる。

こうした移民組織の実態を踏まえると、改めて在日外国人（組織）の調査分析においては、その来日の目的や背景を的確に把捉する重要性が示される。すなわち、生命の保障を求めて来日した難民や経済的な問題から就労を目的に来日した移民と、布教や教勢の拡大など宗教的な動機により来日した移民とではその組織の性格も大きく異なり、ホスト社会との距離感にも違いが生じやすい。在日外国人支援は、これまで多文化共生や人権教育などの観点からもその在り方が議論されてきたが、改めて在日外国人の来日の目的・背景に立脚した多角的な分析を行うことを今後の継続課題としている。

個人研究

近代民衆宗教の集団と実践に関する研究

研究代表者･東京分室 PD 研究員　藤井 麻央
（宗教学）

本研究は、近代日本における民衆宗教の展開の解明に向けて、教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな単位の宗教集団に注目しながら、民衆宗教の実践の一端を明らかにすることを目的とする。

黒住教、天理教、金光教に代表される民衆宗教に対する研究は、教団を特定し、その開教期の教祖、教団、教義を扱う傾向があった。近年になり、教祖以後にあたる明治中期から昭和期の解明も進み始める中、本研究では教団の裾野に広がる多様な活動体による実践をも捉えながら、民衆宗教の展開を明らかにするものである。

2025 年度は金光教周辺の多様な活動体の実践を、活字メディアの機能を踏まえながら解明することに取り組んだ。

近代日本宗教史において、近年注目されているのは教団・寺院・教会の「外」の活動である。吉永進一の「寺院の外に出る」というテーゼはその代表的な問題提起といえる。しかし、「外」を語る際に前提とされる教団組織の境界線の自明性には、素朴な疑問が残る。そもそも「内」と「外」は明確に分かたれるものなのか。本研究では、この問いを念頭に置きながら、金光教周辺に広がる多様な活動体の実践を、活字メディアの機能に着目しつつ解明することを試みた。

分析の対象として、まず戦前の金光教の主要定期刊行物を取り上げ、「制度の内か外か」「一方向か双方向か」という軸で類型化を行った。本部発行の『教報』は制度内・一方向に位置づけられる。一方、金光教徒社の『金光教徒』と青年会系雑誌は制度外・双方向の媒体であった。青年会は明治後期から各地で自発的に興り、大正 7 年に合同、昭和 2 年に本部補助機関となって制度内に移行する。その特徴は、トップダウンではなく下からの運動であり、教義講究を柱とし、月刊誌を持っていた点にある。

こうした『金光教徒』や青年会系雑誌は「本部非公式メディア」として、読者との双方向コミュニケーションを備え、金光教における言論活動のプラットフォーム形成に寄与した。また、「昭和九・十年事件」と呼ばれる管長退任要求と教団改革の運動を、メディアの観点から捉えると情報戦の側面が浮かび上がる。これらの媒体は改革推進側に立ち、読み手の感情と行動規範を形成していった。組織制度外で発達した活字メディアが胚胎していた権力性を、ここに読み取ることができる。

次に、上記の青年会の雑誌創刊に関わった戦前期の金光教の青年リーダー・高橋正雄の個人雑誌『生』を取り上げた。高橋は精神上の行き詰まりを契機に要職を離れ、独自の生活実践を歩んだ。彼を慕う森本直次郎が篠山書房を設立し、高橋の著作と個人雑誌『生』を刊行した。この雑誌をめぐって各地のサークル「生の会」や読者集会が形成され、担い手たちは生活の内省を深めるとともに、地域や立場を超えた人的ネットワークを構築していった。高橋は後に金光教内で教監という要職に就くが、篠山書房は教団から独立した出版社であり、『生』の活動は超宗派的な広がりを持ちながらも金光教と対抗的な関係にはなかった。

以上の考察から見えてくるのは二点である。第一に、言論活動のプラットフォームが持つパワーであり、それは教学の進展や集団活性化をもたらすと同時に、権力性をも胚胎するものである。第二に、活字メディアを介して形成される人的ネットワークであり、教会や地域を超えた紐帯、さらには信徒以外との連携をも生み出す力を持つ。

これらを踏まえると、教団の「内」と「外」は明確に区別できるものではなく、その境界は曖昧かつ流動的である。この視点は、本部の論理や教団の政治とは異なる力学から近代宗教組織を捉え直す可能性を示唆している。

個人研究

慈悲と無慈悲
ー仏教経典と道家典籍の対話

研究代表者･東京分室 PD 研究員　繆 寿楽
（インド哲学・仏教学）

仏教思想は古来、老荘思想の語彙を介して理解を試みた格義仏教に象徴されるよう、道家思想と密接な接点を有してきたが、インド仏教の思想的文脈に根ざした老荘思想との比較研究は未だ限定的である。本研究は、こうした歴史的背景を踏まえ、仏教における独自の聖者像である辟支仏（独覚・縁覚）と、道家における真人という二つの独修者像に焦点を当てる。従来、辟支仏は師なく独りで悟りを開く一方で慈悲や教化を欠く受動的な存在として等閑視されてきたが、本研究では阿含経典等の文献学的分析を通じて、その概念が仏教の展開において果たした積極的な思想的意義を浮き彫りにする。さらに、他者や教えに依存しない両者の独修者的性格が、宗教共同体の枠組みへ包摂される際に行われた定義の修正や再解釈のプロセスを詳細に検討することで、孤立しうる聖者が集団の中でいかに機能的に定位され、宗教構造の多様性を形作ってきたのかを思想史的に解明することを目的とする。この目的を達成するために、2025 年度は以下の研究活動を行った。

（一）2025 年 11 月 22 日には、南山大学南山宗教文化研究所で開催された「三研究所若手研究員合同研究会（テーマ：宗教と社会）」に参加し、研究発表を行った。本発表では、仏教の辟支仏と道家の真人という二つの独修者像の変遷を比較考察し、宗教共同体がこれら孤高の存在を包摂する際に生じる「統合即滅殺」という構造的パラドックスを解明した。初期の独立した聖者像が教団や思想体系に組み込まれる過程で、仏教においては声聞体系の位階へと編入されて倫理的な病理化を被り、道家においては社会秩序の維持者へと再定義されるなど、その超越的な本質が規訓化・制度化されていく過程を浮き彫りにした。こうした文献学的分析から導き出されるのは、共同体による受容とは独修者の本真性の称揚ではなく、組織の論理に即した戦略的な「形象の編集」であるという事実である。総じて、独修者は共同体に深く受け入れられるほどに、その根源的な非依存性を喪失し、体制内の機能的資源へと変容させられるという、個体実践と集団権威の間に介在する不可避な緊張関係を論証した。

（二）2025 年 12 月 26 日から 27 日にかけてオンライン形式で開催された、上海大学主催の国際学術会議「新声巧語人間仏教学術論壇 2026」において、本研究員は研究発表を行った。本発表では、仏教教団の構造において「非核心的役割」と定義される辟支仏と在家信者に焦点を当て、その思想的・社会的意義を系統的に考察した。声聞や菩薩が中心視されるなかで、師に依らず自力で悟る辟支仏は、制度や歴史を超越した解釈の可能性と修行の主体性を象徴し、一方で在家信者は、教団の運営基盤を支えつつ権威の独占を打破する社会的な能動性を発揮してきた。これら二つの存在は、出家と在家という異なる修行の立場から、仏教の法脈と伝播の空間を補完的に拡張しており、その「非中心的でありながら不可欠な」特性こそが、仏教思想が多層的な構造を維持し、歴史的・社会的な活力を保ち続けるための重要な動因であることを明らかにした。

（三）学術論文の公表に関しては、無着著『瑜伽師地論』第 14 章「独覚地」を対象に、サンスクリット原典の精緻な読解に基づく新たな訳註研究を提示する論文「Pratyekabuddhabhūmi の梵蔵漢対照的翻訳研究」を執筆し、『真宗総合研究所研究紀要』へ投稿した。本稿は、先行研究である Kloppenborg（1974）や Yonezawa（1998）に見られる、サンスクリット校訂上の不備や仏教混淆サンスクリット（BHS）特有の語彙解釈における誤謬を正すものである。特に、蔵・漢訳への過度な依存や玄奘訳に見られる独自の解釈的補足に留意しつつ、現存する三種の文献（梵・蔵・漢）を対照させた初の現代日本語訳を作成・提示した。これにより、無着の思想的真意を明らかにするとともに、今後の独覚研究における強固な学術的基盤を築くことを目的としている。

公開シンポジウム報告(2025. 10. 1〜2026. 3. 31)

国際シンポジウム
東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝

東アジア・北アジア仏教研究　研究代表者・教授　松川 節

東アジア・北アジア仏教研究班は2025年11月30日に響流館マルチメディア演習室において国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝」を開催した。本研究班では、2023年度から2025年度までの三年間、東アジア・北アジア仏教史全般に関わる「釈迦如来梅檀瑞像」の伝播を主題として、日本・中国・モンゴル国・ロシア連邦の研究者とともに共同研究を実施した。

インド起源とされるこの瑞像は、中国各地で移転と安置を繰り返したと伝えられる。10世紀後半、入宋した東大寺の僧奝然が開封においてこの瑞像を模刻し、日本に請来した像が京都嵯峨の清涼寺に安置されていることは広く知られている。また、この瑞像は清朝初期に北京の梅檀寺に移されたが、1900年の義和団事件の際に焼失し、その所在は長く不明とされてきた。しかし近年の研究では、この像が密かに北京から持ち出され、モンゴルを経てブリヤートへ運ばれ、バイカル湖東方のエギトゥイ寺に安置されたとする説が提示されている。この問題は、東アジアと北アジアを結ぶ仏教文化交流史を考える上で重要な研究課題である。

本シンポジウムには、梅檀仏研究の第一線で活躍する研究者が各国から参加した。ロシア・サンクトペテルブルクからは、梅檀仏研究の世界的第一人者であり、著書 *The Sandalwood Buddha of the King Udayana*（Sankt-Peterburg, 2010）で知られるアンドレイ・テレンティエフ博士が参加した。モンゴル・ウランバートルからは、モンゴル国立大学科学学部人文系列哲学宗教学科教授でありモンゴル国大統領顧問でもあるソドノムドルジ・ヤンジンスレン博士と、モンゴル仏教総本山ガンダンテグチェンリン寺学術文化研究所事務局長・研究員のノロブツェデン・アムガラン師が参加した。ヤンジンスレン博士はモンゴル語文献に見える梅檀仏関係著作を分析し、アムガラン師はモンゴルにおける梅檀仏信仰の展開を報告した。中国・北京からは、中国社会科学院古代史研究所研究員で、モンゴル・チベット歴史文献学を専門とするチンゲル博士が参加し、清代における梅檀仏信仰を論じた。

日本からは、契丹仏教史を専門とする龍谷大学文学部准教授の藤原崇人博士が、遼・金時代における梅檀仏信仰の歴史的展開について報告した。また、京都府立大学文学部教授の本井牧子博士は、日本における梅檀仏信仰の概要とともに、清涼寺所蔵の絵画『釈迦堂縁起』について発表を行った。

さらに、コメンテーターとして三宅伸一郎大谷大学文学部教授および佐藤愛弓大谷大学文学部教授が参加した。三宅教授はチベット学の観点からヤンジンスレン博士の報告にコメントし、佐藤教授は日本中世文学・仏教説話文学の立場から本井博士の報告にコメントを行った。また筆者も藤原博士の報告にコメントした。

本シンポジウムの中心的課題は、第一に東アジアから北アジアへと伝播した梅檀仏信仰の歴史的展開を解明すること、第二に日本における梅檀仏信仰の展開を明らかにすることである。日本における梅檀仏信仰は広範に流伝しており、その研究蓄積も豊富であるが、本井博士の発表によってその具体像が改めて整理された。

一方、東アジアにおける梅檀仏の流伝に関する研究は、日本においても徐々に蓄積されてきた。とりわけチベット・モンゴル仏教世界における伝播については、20世紀初頭、浄土真宗の僧侶である寺本婉雅が北京で梅檀仏について見聞し、1904年の記録の中で、この像がブリヤートへ移された可能性を記していることが知られていた。その後の学術研究としては、京都府立大学の若松寛による1980年の論文「康熙御製梅檀仏西来歴代祝記と章嘉呼図克図」が先駆的研究として挙げられる。この研究により、ジャンジャ・ロルビドルジの著作が初めて日本語で紹介された。さらに、龍谷大学の百済康義による2004年の研究「〈梅檀瑞像中国渡来記〉のウイグル訳とチベット訳」によって文献学的研究が大きく進展した。これらの研究成果についても、藤原博士の発表で詳しく扱われた。

梅檀釈迦如来瑞像の伝播の問題は、単に一つの仏像

の移動史を解明することにとどまらず、東アジアと北アジアを結ぶ仏教文化交流の広がりを考える上で重要な手がかりを与えるものである。とりわけモンゴルは、歴史的にユーラシア世界の東西交渉に深く関与してきた地域であり、梅檀仏信仰の伝播の過程を検討することは、この広域的な仏教文化交流の実態を理解する上でも大きな意味を持つ。研究は、東アジア・北アジアにおける仏教文化交流史の解明に新たな視点を提供し、今後の研究の深化につながることが期待された。

プログラムは以下のとおりであった。

・開会の辞（松川節）
・ご挨拶（鈴木寿志）
・発表1：アンドレイ・テレンティエフ「「梅檀仏」再考」【英語】 コメンテーター：チンゲル
・発表2：ソドノムドルジ・ヤンジンスレン「モンゴル人が著したザンダン・ゾーに関する若干の著作の検討」【英語】 コメンテーター：三宅伸一郎
・発表3：チンゲル「清代における梅檀仏信仰」【日本語】 コメンテーター：ヤンジンスレン
・発表4：ノロブツェデン・アムガラン（モンゴル、ウランバートル）「モンゴルに流布した梅檀仏信仰」【モンゴル語】 コメンテーター：テレンティエフ
・発表5：藤原崇人「金元時代の梅檀仏信仰」【日本語】 コメンテーター：松川節
・発表6：本井牧子「嵯峨清涼寺の「釈迦堂縁起」と日本における梅檀仏信仰」【日本語】 コメンテーター：佐藤愛弓（日本、京都）

各報告はモンゴル語、英語、日本語でなされ、報告内容は三言語に翻訳されて机上配布された。また、各報告それぞれに対して予めコメンテーターを指名し、コメントも三言語に翻訳して机上配布し、円滑な相互理解を目指した。

なお、開催に先立つ11月29日、会議参加者一行は京都嵯峨の清涼寺を訪問し、東大寺の僧奝然が日本に請来したこの瑞像を実見した。

本シンポジウムの成果は、国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝」論文集として2026年3月に出版された（総頁数200頁）。



左よりチンゲル博士、テレンティエフ博士、アムガラン師



ヤンジンスレン博士



本井博士

公開研究会・講演会報告（2025. 10. 1～2026. 3. 31）

大谷大学第三代学長・佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」100 年　記念公開研究会

2025 年度特定研究「大谷大学樹立の精神」100 年　研究員・准教授　戸次　顕彰

2025 年度は、1925 年 5 月の入学宣誓式において、第三代学長・佐々木月樵（1875-1926）が「大谷大学樹立の精神」（以下、「樹立の精神」）の告示を行って 100 年の節目となる。「樹立の精神」は、初代学長・清沢満之（1863-1903）の「真宗大学開校の辞」と並んで、大谷大学の建学の精神を表明したものとして、本学がこれまでも大切に受け継いできたものである。

そこで 2025 年 10 月 11 日、午後 2 時より、「大谷大学第三代学長・佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」100 年記念公開研究会」を、本学・響流館のメディアホールを会場として開催した。この日は午前中に本学の開学記念式典が講堂にて執り行われた日でもあり、学内関係各所のご協力のもと、その午後に本研究会を開催できたことは誠に幸いであった。

研究会では佐々木の華厳研究に焦点を当て、学内外の有識者から提題をいただいた。登壇者には真宗大谷派親鸞仏教センター嘱託研究員の伊藤真氏と、大谷大学名誉教授・真宗大谷派教学研究所長の織田顕祐氏をお招きした。両氏はこれまでも佐々木に関する論文を複数発表するなど、早くから佐々木に関心を寄せていた仏教学者である。

伊藤氏は「学問と宗教、芸術、人－佐々木月樵・華厳研究のパースペクティブ－」と題して、佐々木自身のことばや、暁烏敏など佐々木と同時代人の証言などに基づきつつ、佐々木の研究姿勢を明らかにした。そのうえで、佐々木の『華厳経』研究には「人」を中心に据えた新しい研究の見方があったことを指摘し、こうした視点が、『華厳経』の構造や、その中でも特に「入法界品」の善財童子に注目する佐々木の学的態度の背景にあることを論じた。さらに、この「人」中心の研究姿勢は、芸術や宗教を論じる佐々木の背景にもあることを論じられた。

また織田氏は「佐々木月樵における大乗の探究－「樹立の精神」から「教行信証の三部経」へ－」と題して、佐々木の生涯を回顧しつつ、佐々木が提唱した「教行信証の三部経」という説示に注目した。従来全く言われることのなかった「教行信証の三部経」という佐々木の説示は、佐々木の親鸞研究の中から導き出されたものであるというが、佐々木はその「教行信証の三部経」という言葉のみを提唱し、詳細を語らずに逝去されてしまわれたことから、この残された佐々木の課題を織田氏自身が課題としているとして、『無量寿経』を支える『華厳経』と『涅槃経』の意義を論じられた。



伊藤真氏

両氏は、いずれも仏教学の中でも、中国の華厳教学を専門とされる。中国の華厳教学は唐代の賢首大師法蔵によって大成されたとされ、織田氏はその法蔵の



織田顕祐氏

師・智儼を中心に、また伊藤氏は法蔵と同時代の李通玄を中心に長く華厳教学を研究してこられた。こうした中国の華厳教学は、日本にも伝わり、長い伝統を有するが、両氏はこれまでの自身の華厳研究の立場から、佐々木の『華厳経』研究はこうした伝統にとらわれない、『華厳経』に対する新しい見方を提唱したという指摘をしている点が共通していた。これは近代における佐々木の仏教研究の特徴を見ていくうえでの重要な視座を与えるものである。



シンポジウムの様子

佐々木が「樹立の精神」の中で述べる、仏教・真宗を学ぶ本学学生への願いは、「一切経典の重要なるものに直面」してほしいということであった。佐々木の言うその「直面」とは、「各宗の註釈の刀に料理された所の経典ではなく、生命の溌溂たるありのままの仏教経典そのものの本義に味到することである」（本学「学生手帳 2026」9 頁参照）ということであった。

「樹立の精神」100 年を記念した本研究会では、佐々木の『華厳経』研究を取り上げて、佐々木自身が主体的に仏教研究・経典研究を実践したことを振り返ることができたとともに、それが同時に本学の真宗学・仏教学の学術や、さらにそれを学ぼうとする学生への願いでもあったことを確認することができた。

三研究所若手研究員合同研究会 ～「宗教と社会」をテーマに～

東京分室長・准教授　後藤 晴子（執筆担当）
東京分室 PD 研究員　高橋 泉、藤井 麻央、繆 寿楽

2025 年 11 月 22 日（土）に大谷大学真宗総合研究所東京分室（以下、東京分室と記す）は、南山大学・南山宗教文化研究所（以下、南山宗教文化研究所と記す）、同朋大学・仏教文化研究所（以下、仏教文化研究所と記す）とともに、研究所間および PD 研究員相互の交流に加え、「宗教と社会」に関する学際的な議論の場とすることを目的とする公開研究会（ハイブリッド形式）をはじめて合同開催した。対面会場は南山宗教文化研究所 1 階会議室である。対面及びオンラインで 31 名の申込があり、当日は登壇者も含め出入りはあったが最大 25 名程度の参加があった。

第 1 部では PD 研究員の活動を相互に紹介し、第 2 部では「宗教と社会」をテーマにそれぞれの研究所から 1～2 名が代表して研究発表を実施した。

当日は冒頭、南山宗教文化研究所所長・渡部森哉教授より開式の挨拶が述べられた。続いて第 1 部の「活動報告」では後藤が司会を担当し、南山宗教文化研究所の第一種研究所員の守屋友江教授、東京分室の藤井麻央研究員、仏教文化研究所の石原和所員がそれぞれ活動報告を行った。守屋教授は研究所の成立の経緯と研究所のプロジェクト等について、藤井研究員は主として東京分室の共同研究「宗教と社会」研究の公開研究会やシンポジウム及び長崎調査について、石原所員は展示企画や一般向け講座企画などの活動を中心に報告を行った。各研究所によって PD 研究員制度は大きく異なるが、それぞれに特色のある活動が報告された。

第 2 部では、後藤と守屋教授が司会を務め、各研究所を代表し PD 研究員各位が発表を行った。

第 1 発表の東京分室の繆寿楽研究員（仏教学）は、「独修者はいかに宗教に受容されるか－辟支仏と真人の位置付けをめぐって－」と題し、仏教における辟支仏と道家における真人といった「独修者」が、宗教団体にどのように受容されているかについて教典に基づき比較を行った。

第 2 発表の南山宗教文化研究所の山田智正研究員（宗教哲学）は、「リクールにおける死後の生　－晩年の遺稿集『死まで生き生きと』における不可知論的態度から－」と題し、死後の生のあり方として、リクールの思い煩いのない態度を「神の顧みへの信頼」を中心に、プロセス神学への言及やリクールの高弟オリヴィエ・アベルの指摘から提示した。

第 3 発表の東京分室の高橋泉研究員（教育学）は、「社会的要請と宗教組織の制度的選択－就学前教育の事例から－」と題し、キリスト教系宗教組織による社会活動と公益事業との関係性について、宗教的背景を基盤として実施される事業における教派的特質や神学的立場の影響、公的制度との接続／非接続という制度的選択による作用などについて検討を行った。

第 4 報告の石原所員（歴史学）は、「世に知られぬ」如来教というレンズを通じて、近世後期名古屋の人々の信仰の様相と、日本宗教の近代経験を読み解くことを目的に、同朋大学仏教文化研究所 2025 年度後期史料展示「近代宗教史の中の如来教－『世に知られぬ一種独特な宗教』」の開催にあたり、展示の内容に関連しつつ、①名古屋と如来教、②如来教に見る宗教の近代経験を紹介した。

4 名の発表に対し、コメンテーターの南山宗教文化研究所の佐藤麻貴研究員、東京分室の藤井研究員から質疑とコメントが行われた。まず佐藤研究員から、繆研究員に対して維摩経や無為自然、山田研究員に対してリクールの「死まで生き生きと」というキーワード、高橋研究員に対して教育現場におけるライシテに対する感度、石原所員に対して日本の宗教ではなぜ和合への力が働きがちなのか、などの多様なコメントと質問が投げかけられた。つぎに藤井研究員から、石原所員と高橋研究員に対し①宗教組織と社会制度について、繆研究員、山田研究員、石原所員に対し②研究資料のアーカイブ化に関する分野横断的なコメントと質問が行われた。これに対し各氏からリプライが行われ、「宗教と社会」をテーマに専門分野にとらわれない、また所属学会等とは異なる充実した議論が交わされた。

最後に大谷大学真宗総合研究所所長・鈴木寿志教授から閉式の挨拶が行われ終了した。本企画は、東京分室にとって初めての試みだったが、各研究所の活動や研究成果を知ると共に、交流を深める良い企画となった。東京分室では今後もこのような企画の可能性を模索していきたい。

現代日本の地域寺院と外国人仏教徒
－宗教空間における関係性の諸相－

宗教・社会研究　東京分室長・准教授　後藤 晴子
東京分室 PD 研究員　鶴留 正智、高橋 泉（執筆担当）、藤井 麻央、繆 寿楽

2025 年 12 月 15 日（月）に、大谷大学真宗総合研究所東京分室が主催となり、北九州市立大学国際教育交流センター准教授の清藤隆春氏を講師として招聘し、「現代日本の地域寺院と外国人仏教徒－宗教空間における関係性の諸相－」という題目で公開研究会（ハイブリッド）を開催した。

清藤氏は、外国人仏教徒を中心とした在日外国人、特に在日ベトナム人の宗教実践の解明を試みる調査を続けられ、そこから日本の地域寺院が何を学びうるかという視点も含めて、異国における在日外国人の信仰というものについての考察を続けられている。近年では、四国地方・九州地方などを中心とした在日外国人の信仰と地域との関わりに関する著書も刊行された。今回の研究会では、こうした論考を踏まえて、在日外国人の信仰にどのように地域社会が向き合い得るかについて、宗教社会学的に考察することを試みた。

公開研究会は、大谷大学響流館 3 階マルチメディア演習室を講演会場とした。会場には、鈴木寿志所長をはじめ箕浦暁雄主事、後藤晴子東京分室長、東京分室の PD 研究員とともに、仏教・真宗学研究者などが集まった。オンラインにおいても広く学生や研究者などの参加があり、国内で増加する在日外国人とその宗教実践及び地域寺院の取り組みに対する関心の高さが窺われた。開会に当たり、鈴木寿志所長は近年の在日外国人の増加の状況に言及し、共生の在り方が一層問われる現代において、本研究会は多くの示唆を与えるだろうとの高い期待感を表明した。

清藤氏の講演では、はじめに在日外国人と宗教の調査に関する研究の背景を確認するところから始まった。清藤氏は、2019 年以降、国内の地域寺院に着目しながら移民と宗教に関する研究に取り組み、留学生教育にも携わってこられた。また浄土真宗本願寺派の僧侶としても活動され、地域に根差した宗教者としての側面も有する。清藤氏は、こうした研究者と宗教者という二つの側面を併せ持ちながら、近年では地域寺院と大学との連携による国際共修への取り組みも実施されている。また移民と宗教を扱った従来の研究が、地域における支援セクターとしての宗教組織の意義や役割を考察することを主眼としてきたのに対し、清藤氏の研究は、在日外国人の信仰を客観的に捉えることに主軸が置かれている。

講演では、外国人仏教徒への聞き取りから、生活上の問題や言葉の壁など在日外国人が抱える多様な苦悩も含めてかれらの実態が明らかにされ、その心の拠り所については、清藤氏自身の宗教者としての立場も含めた考察が語られた。講演に対しては、地域社会における外国人住民をテーマとした理論的・実証的研究を蓄積している本学社会学部教授の徳田剛氏からコメントを頂いた。徳田氏は、初めにカトリックによる移民支援の特質を提示するとともに、地域寺院による社会活動の性質を捉え直す必要性を示した。質疑では在日外国人の実生活において、地域寺院が果たす役割や今後の可能性などが取り上げられた。また会場・オンライン参加者からも活発な議論が行われ、閉会に際して、箕浦氏は地域寺院による多文化共生の取り組みに触れ、地域社会における寺院の在り方を改めて考える機会となったと述べた。本研究会では、在日ベトナム人仏教徒の宗教実践を捉え、そのあり様や宗教が果たす役割を再考する清藤氏の試みを通じて、参加者に有益な視点を共有できたと思われる。



東京分室 PD 研究員研究報告会

東京分室長・准教授　後藤 晴子
東京分室 PD 研究員　高橋 泉、藤井 麻央、繆 寿楽（執筆担当）

2026 年 3 月 3 日（火）に、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、大谷大学響流館 3 階マルチメディア演習室で「真宗総合研究所東京分室 PD 研究員研究報告会」を開催した。各研究員の報告概要は以下の通りである。

高橋研究員の研究課題は外国人支援における宗教の関与の実態や役割を明らかにしていくことである。2025 年度は、神奈川県内の在日米軍基地周辺地域に着目し、戦災孤児としての外国につながる子どもの支援における宗教組織の関与の実態について調査を進めた。今回の報告では、特に支援母体となったカトリック横浜司教区及び米軍基地内のプロテスタント関係者による活動に焦点を当て、その内容と教派的特質についての考察を発表した。カトリック横浜司教区は、在日米軍基地周辺地域に約八千坪の土地を購入して戦災孤児としての外国につながる子どもの支援施設を建設するが、この建設費はローマ法王庁及び米国の枢機卿からの寄付金のほか、横浜のカトリック信者や米軍の宗教関係者からの寄付金により賄われた。なお 1954 年当時のローマ教皇はピオ 12 世であったが、この時教皇庁へ寄付の依頼を行ったのは横浜司教を中心とした日本のカトリック指導者であったことが、関係者への聞き取り調査によって明らかになった。さらにプロテスタントの社会活動については、同一教派内の諸組織との連携やより広いプロテスタント・ネットワークといったものの影響も大きい。このため、本事例におけるプロテスタント・ネットワークは、東京都・神奈川県の各米軍基地における、従軍チャプレン同士の横のつながりとして早期から機能した可能性が考えられた。

藤井研究員の研究課題は、近代日本における民衆宗教の展開の解明に向けて、教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな単位の宗教集団に注目しながら、民衆宗教の実践の一端を明らかにすることである。2025 年度は金光教周辺の多様な活動体の実践を、活字メディアの機能を踏まえながら解明することに取り組み、その報告を行った。

研究の一つとして、金光教の新聞・雑誌を分析した。「お道の新聞」として知られた『金光教徒』や青年会系雑誌は、金光教本部とは距離を置きながら、出版と言論活動を行っていた。このような制度外の「本部非公式メディア」が、読者との双方向コミュニケーションを一定程度備えたことで、金光教における言論活動の基盤的環境（プラットフォーム）の形成に寄与していたことを指摘した。もう一つの研究では、金光教の教監等も務めた高橋正雄の個人雑誌『生』を中心に分析した。高橋の言論活動は金光教から独立した出版社である篠山書房を主要な舞台として展開され、高橋を慕う担い手によって各地でサークル等が生じた。

このように活字メディアを通じて、青年会、出版社、サークル等の教団の裾野に広がる多様な活動体をみることで、教団の「内」と「外」の曖昧性・流動性に着目する必要性が浮かび上がった。

繆研究員は、仏教思想の構造を解明すべく、インド仏教論理学の文献学的な調査と、辟支仏（びゃくしぶつ）をはじめとする独修者の聖者概念に関する比較研究に取り組んでいる。2025 年度は主に、法上の認識論と、辟支仏という存在の歴史的変容について分析し、その成果を報告した。認識論の領域では、サンスクリット語原典『量決択注』等をチベット語訳と対照しながら精読した。これにより、感官による知覚から論理的な推理・思考へと切り替わる人間の認識変換メカニズムを考察した。他方で聖者概念の領域では、教団組織の外部にいる辟支仏に焦点を当てた。在家信者と対比することで、彼らが仏教の真理を担保する精神的な基盤であったことを示すと同時に、教団が巨大化・組織化するにつれて、その存在が管理され格下げされていった歴史的変遷を指摘した。これらの研究成果は、上海大学人間仏教研究センターなどで発表された。緻密な文献読解と国際的な学術交流を通じ、宗教的な共同体と傑出した個人の関係性というテーマへ迫る必要性が示されている。



公開研究会「一燈園研究のこれから －近代宗教史における一燈園の諸相」

宗教・社会研究　東京分室長・准教授　後藤 晴子
東京分室 PD 研究員　高橋 泉、藤井 麻央（執筆担当）、繆 寿楽

2026 年 3 月 9 日（月）に、真宗総合研究所東京分室の活動として、科研費基盤研究（C）「近代日本の宗教思想における女性性の意味と役割：一燈園西田天香新資料をベースにして」（23K00079）と共催で、「一燈園研究のこれから－近代宗教史における一燈園の諸相」を開催した。関西大学東京センターの会場とオンラインで計約 50 名の参加があった。

第一部「一燈園研究が有する可能性」では、科研の研究代表者である水野友晴氏（関西大学）の司会で進行した。冒頭は、大澤絢子氏（東北大学）による講演「修養で読み解く一燈園とダスキン」であった。修養論の観点から、①宗教史における一燈園、②一燈園とダスキンの関係、③ビジネスと宗教の関係を考察し、近代日本社会・資本主義経済と宗教の関わりを読み解く内容であった。①の考察では、その位置づけにあたって教団型の宗教ではなく、独立系宗教と内面倫理宗教という視点が提示され、続く②の考察では、天香の経歴における通俗道徳との距離感の変化や、鈴木清一（ダスキン創業者）の経歴における信仰と経営理念の関係などに分析が加えられた。③の考察では、四つの分類を参照しながら、一燈園とダスキンの関係は、信仰や修養と経済が結びついたモデルであったと指摘された。最後に、修養は、通俗道徳よりも当時の社会に即した形で、資本主義下で働く人々の精神性を支えていたとの結論が示された。

続いては、長舩樹氏（同志社大学大学院）による翻刻報告「西田天香の手紙－勝淳保存書簡を読む」であった。勝淳（天香の妻・奥田勝子）宛天香書簡をもとに天香の女性観・男性観が検討された。その上で、さらなる究明には思想の論理構造や時期的な変化などの分析が必要であると述べられた。翻刻監修の宮田昌明氏（一燈園資料館「香倉院」）からも、天香書簡の特徴や香倉院史料の全体像などが紹介された。

最後は、大橋良介氏（日独文化研究所）のコメントであった。一燈園のあり方が時代や立場に異なることが説明され、「一燈園」という言葉の範囲を明確にする重要性が指摘された。その上で、勝淳宛天香書簡が一燈園生活の原点の解明に寄与し、新しい方向性を開くものであるとの認識も示された。

第二部「社会の中の一燈園」では、冒頭に藤井より趣旨説明を行った。まず、近年の一燈園や天香の再評価の背景を紹介しながら、一燈園という思想運動に含まれる多様性が示されつつあることを説明した。それを踏まえて、従来の研究が天香や集団生活者に焦点を当ててきたのに対し、支援者、光友、読者、研修参加者など多様な関与者が存在した点を指摘し、一燈園を多様な関与者の集合体として捉え、その拡張・拡散の過程を検討する必要性を提示した。

末村正代氏（千葉経済大学）は、「ユートピア思想の系譜と西田天香の試み」と題し、天香の初期構想から一燈園のユートピア的要素を検討した。天香の構想は宗教的真理「天華香洞」、その実践である「一燈園」、財を管理する「宣光社」の「三位一体」であり、一燈園自体は最終目的ではなく宗教的真理への「化城」や「仮の場所」と位置づけられると論じた。天香においては、「ここ」が即ユートピアという「不二」の関係であり、ユートピアを、実践を通して完成されていく現実の人間の上にみるのであった。

長谷川怜氏（皇學館大学）は、「一燈園の満洲農場「燈影荘」の活動と特色」と題し、一燈園の農業共同体である燈影荘について検討した。関東州に成立した燈影荘は、質素な共同生活を基盤に満州の土地に相応しい農業経営を行い、周辺農民との協力関係も築いた。行政から好意的評価を受け、少年少女文学では理想的移民村として描かれた。燈影荘は、満洲経営の中に宗教的利他行にもとづく地域形成や日満融和を志向する試みが存在したことを示す事例であると位置づけた。

続いて藤井が「一燈園精神を普通生活の中に翻訳すること」と題して、「最古参の光友」である柳原舜祐の活動を取り上げた。柳原は托鉢生活後に学校に勤めながら「まことの郷」を運営し、学生や青年に指導を行った。これを、集団生活の外で一燈園精神が再構成され社会に広がる事例と位置づけた。

コメンテーターの永岡崇氏（駒澤大学）は、資本主義を批判する思想が資本主義社会と共存する過程として一燈園の拡張・拡散を捉え、各報告にコメントした。続くパネルディスカッションでは、大橋氏から、

全体として一燈園の展開における光と影の両側面が浮かび上がり、これが一燈園研究のこれからの課題につながるとの指摘があった。参加者からは「懺悔」が存在転換の契機となりうるかという問いや、イスラームとの比較から仏教的無所有の理想という文化的背景を問うコメントが寄せられた。最後に分室長・後藤の閉会挨拶をもって締めくくられた。

（より詳細な報告は『光』2026年6月号（1262号）、一燈園出版部、2026年6月に掲載。なお、本稿の執筆にあたり末村正代氏にご協力をいただいた。）



国際ワークショップ「日本におけるモンゴル研究の現状と課題」

東アジア・北アジア仏教研究　研究代表者・教授　松川 節

東アジア・北アジア仏教研究班は2026年3月27日に響流館マルチメディア演習室において国際ワークショップ「日本におけるモンゴル研究の現状と課題」を開催した。大谷大学真宗総合研究所はモンゴル国立大学と研究協定を締結し、共同研究を行ってきた。研究の主な担当部署は指定研究「東アジア・北アジア仏教研究班」で、2023年度から2025年度までの研究計画「アジア東方における『釈迦如来梅檀瑞像』の伝播に関する研究」においては、2024年度にモンゴル国立大学より2名、2025年11月30日（日）には国際シンポジウムを開催してモンゴル国立大学より1名の研究者を招聘した実績がある。また、本研究班代表の松川が2024年12月にモンゴル国立大学科学学部より名誉博士号を授与された経緯もあった。

このたび、モンゴル国立大学副総長D. ザヤーバータル氏より連絡があり、2026年3月末（3月26日～29日）にモンゴル国立大学代表団が京都を訪問し、大谷大学長への表敬訪問を行うとともに、ワークショップ「日本におけるモンゴル研究の現状と課題」を開催したいとの意向が示された。これを受けて、本ワークショップ開催の運びとなった。代表団には、モンゴル国立大学総長、副総長、複数の学部長などの執行部をはじめ、共同研究においてこれまで二度にわたり大谷大学に滞在したU. エルデネバト教授も含まれていた。プログラムは以下のとおりである。

・開会式（司会：松川節）
・開会の辞：鈴木寿志（研究・国際交流担当副学長；真宗総合研究所所長）
・挨拶①B. オチルホヤグ（モンゴル国立大学総長）
・挨拶②小長谷有紀（国際モンゴル学会会長）
・挨拶③D. ザヤーバータル（教学・学生振興担当副総長；国際モンゴル学会事務総長）
・研究発表①D. ザヤーバータル：「モンゴル研究の現況とその振興策」
・研究発表②松川節「日本におけるモンゴル仏教研究の発展と現況」
・研究発表③U. エルデネバト（モンゴル国立大学科学学部社会科学系列考古人類人口学科主任・教授）「モンゴルと日本の学者の考古学共同研究について」
・研究発表④B. オチルホヤグ、Ts. バータルチョローン（研究・協働担当副総長）、B. ボルドエルデネ（科学学部長）、O. ムンフバト（科学技術ウランバートル学部長）、S. ムンフバト（政治学・国際関係・公共行政学部長）、G. エルデブオチル（科学学部人文科学系列長）、Sh. トヤー（科学学部人文科学系列考古人類人口学科上級講師）「モンゴルと日本の大学間のモンゴル研究分野における共同の現況」

その他のワークショップ参加者は、箕浦暁雄（真宗総合研究所主事）、井黒忍（本研究班研究員）、松浦典弘（本研究班研究員）、A. ボルマー（本研究班嘱託研究員）、松田孝一（大阪国際大学名誉教授；モンゴル科学アカデミー外国会員）、村岡倫（龍谷大学文学部教授）、荒井幸康（大阪大学外国語学部助教）であった。

なお、ワークショップ終了後には、一楽真・大谷大学長をはじめとする大学執行部との面会も行われた。



開会式で挨拶するB. オチルホヤグ・モンゴル国立大学総長

国内研究調査報告（2025. 10. 1～2026. 3. 31）

国内研究調査報告（2026.2.11～2026.2.13）長崎

東京分室長　准教授　後藤 晴子
東京分室 PD 研究員　高橋 泉、藤井 麻央、繆 寿楽（執筆担当）

2026 年 2 月 11 日（水）から 13 日（金）にかけて、後藤晴子（東京分室長）・高橋泉（PD 研究員）・藤井麻央（PD 研究員）・繆寿楽（PD 研究員）の 4 名が、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、キリスト教や仏教、民間宗教などが混在する長崎という地域に注目することで、諸宗教と現代社会とのかかわりの実態を明らかにするために、現地調査を実施した。以下では、調査概要を報告する。

1 日目である 2 月 11 日は、佐世保から平戸へ移動し、最初にカトリック宝亀教会を訪れた。カトリック宝亀教会の歴史は、禁教高札の撤去後である 1878 年にペルー神父による宣教が再開され、1885 年に宝亀地区・京崎の信徒らが民家御堂の屋敷内に仮教会（聖ヨセフ教会）を設立したことに始まる。1898 年には宝亀教会初代司祭となるマトラ師の私財と信徒らの献金により、現教会堂の献堂・設立認可が行われた。宝亀小教区には、宝亀教会のほか巡回教会として山野教会及び中野教会がある。宝亀小教区の信徒数は、仮教会の設立から 125 周年を迎えた 2023 年には 191 名で、このうち宝亀教会の信徒数は 95 名とされる。

当日は宝亀教会の信徒 4 名・隣接する紐差地区の関係者 1 名のほか、昨年度に引き続き平戸市生月町博物館・島の館館長の中園成生先生にも参加を頂き、はじめに当方や教会関係者らの質問も交えながら、中園先生によるレクチャーを受けた。内容は主として、外海地方から五島列島（以下、五島）などへ移住したかくれキリシタンを中心とした人々の暮らしについてである。かくれキリシタンの潜伏先となっていた外海地方は、平地が少なく稲作に適さない土地であった。このため外海では畑作が生業の基盤とされ、痩せた土地でも収穫が可能な甘藷の栽培を中心とした農業が営まれていた。甘藷は斜面を活用して栽培され、生芋の他、茹でた後乾燥させることで長期保存が可能となり、江戸時代には栄養価の高い機能性食品としても重宝された。1732 年の害虫被害による大飢饉では全国的に餓死者も生じていたが、外海地方への被害は比較的少なかったとされる。これは日頃から保存食として甘藷を蓄えていたことが背景としても考えられた。また五島の漁業では、鯨のほかまぐろ・きびなご・シイラ・いわしなどが捕獲されていた。これらの魚類は煮た後で油を取ったり煮干しにする必要があったため、薪を入手するための農民が必要とされていた。さらに江戸時代後期の五島では、疱瘡の流行に伴う人口減少の問題があった。このため外海地方からの移住者は、地場産業の労働力としても五島藩主に喜ばれた。



2026. 2. 11　中園先生レクチャー

中園先生のレクチャーの後は、宝亀教会の信徒から主に戦後のカトリック信徒の生活状況について話をうかがうことができた。江戸時代の移住者の子孫であるカトリック信徒らは、中山間部を中心に集落を形成していった。このためカトリックの人々の生活は貧しく、芋・麦・豆・稗などを少量の米に混ぜて炊くような暮らしぶりであった。また炭鉱に農作物を売りに向かうこともあったが、農業のみでは生活が成り立たず、漁業や都市部への出稼ぎも行われた。宝亀地区・京崎の例では、佐世保など都市のし尿を相浦からだんべ船で運んで堆肥に利用し、薪・炭や野菜を炭鉱地帯などで販売することで生計を立てていた。一方、海岸や港周辺には仏教徒が集住し、漁業による富を得て豊かな生活を送っていた。紐差地区の関係者によれば、平戸における仏教徒の宗派には、浄土宗・日蓮宗・真言宗のほか浄土真宗本願寺派などが挙げられるとい

う。また宝亀地区では仏教徒とカトリック信徒との住む区域が明確に分けられており、自治会費をめぐる独自の負担制度なども設けられていた。こうした宗教によって生活区域を分ける宝亀地区の慣習は墓地の造りにおいても見られ、宗教が混在して墓石が建てられている生月島や紐差地区との違いがあった。

午後は宝亀教会関係者の案内のもと、巡回教会である中野教会及び山野教会を周った。このうち、山野教会の関係者には立ち合いの協力を頂き、隠居分家や一家一墓制など、地域独自の歴史や慣習についての説明を受けることができた。農村の山野地区では麦飯が主食で、外海同様、山羊が食べられていた。また労働力としての役割を終えた牝牛は食用に加工され、まちの人々で分け合うこともあったという。



2026. 2. 11　山野教会

巡回教会の視察後は再び宝亀教会に戻り、教会堂内を見学した後、信徒から教会信徒数の推移や信仰生活などについて聞き取りを行った。現在宝亀小教区は、信徒の高齢化や若い世代の地区外への流出に伴い、500名弱の信徒が確認された1985年当時の規模からは約4割まで縮小している。このため教会は地域の観光資源として、地域全体で維持管理していく必要性も生じている。ただ信徒にとって教会は聖なる祈りの場である中、教会を観光産業に組みこむことについては、関係者からは様々な意見があるとの状況も語られた。なおカトリック長崎大司教区は長崎県単体で教区を形成していたが、近年の日本人司祭の成り手不足等の状況を踏まえ、九州地域の教区再編が見込まれるとともに、外国人司祭の着任なども行われている。

一方、2018年の長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録後には、観光目的で教会に来訪する人々も増加している。宝亀教会においてもこうした観光客は増加しており、訪問に伴う収益は教会の財政的側面に大きく寄与している。また地区外に就職した若い世代などは、帰省時など限定的なかかわりではあるものの、教会ミサに与る光景もみられるということであった。なお今回の訪問に際しては、宝亀教会女性部の方々による手厚いもてなしを頂いた。



2026. 2. 11　宝亀教会

12日は、佐世保駅から黒島へ移動し、黒島観光協会ガイドの案内のもと、黒島神社、本村集落、庄屋屋敷跡、興禅寺、蕨展望所、仕切牧墓地、黒島教会、小田平墓地、マルマン神父の墓を巡検した。

黒島神社は、平戸の志々伎神社と同じ神様を祀っている。1863年の絵図には、現在の黒島神社が「志加神社」という名称で描かれている。明治時代初期に、「志加神社」から「黒島神社」へと名称が改められた。

本村集落と庄屋屋敷跡については、16世紀頃から黒島を領有した西家とその家臣が暮らし始め、現在もその子孫が多く居住している。集落内にある墓石から、集落の成立自体は14世紀以前であると考えられている。港から上がった場所に家屋が密集して建てられており、集落の正面からは平戸島を望むことができる。

曹洞宗興禅寺は平戸の瑞雲寺の末寺として、泰霊禅山大和尚を開基とし創建された。1803年に、津吉の長泉寺の末寺（隠居寺）となった。当初はやや南東の「寺山」と呼ばれる場所にあったが、後に現在地へ移転した。かつて本堂には本尊の阿弥陀如来像とともに、潜伏キリシタンがマリア像に見立てて隠したと考えられる子抱観音像が安置されていた。

蕨展望所については、海に向かって左側に外海地域、右側に五島が位置している。沖合には、左側に大立島、右側に江ノ島が見える。また、天候が良い日には五島も望むことができる。

仕切牧墓地は、蕨集落の住民の墓地である。1877年前後に黒島教会近くに新しい共同墓地が造られて以降、黒島内の多くの墓地でカトリックの埋葬が停止され、そちらへ移行した。仕切牧墓地では新しい墓地ができた後も建立が続いたため、江戸時代の積石墓、仏教様式墓、カトリック様式墓が混在している。



2026. 2. 12　黒島教会

黒島教会は、1878年にペルー神父が名切に建立した木造教会堂を前身とする。その後、1897年にフランス人のマルマン神父のもと、信徒の献金や労働奉仕によって煉瓦造教会堂の建設が始まり、1902年に現在の建物が竣工した。内部の床は当初板敷きだったが、畳敷きを経て、1991年に長椅子が設置される形へと変遷している。これらの歴史と建築的背景から、1998年に国指定重要文化財に指定され、2018年には世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産に登録された。建物の外観は、アーチを用いたロマネスク様式の三廊式教会堂で、基礎には黒島御影石が使われている。建築には約40万個の煉瓦が使用されており、その一部は黒島で製造されたものである。内部の壁面は下からアーケード、トリフォリウム（壁付アーチ）、クリアストリー（高窓）から成る三層構造で、天井にはリブ・ヴォールト（こうもり天井）が採用されている。

小田平墓地とマルマン神父の墓については、初代黒島教会の完成に伴い、教会に近い現在地に新たな墓地（カトリック共同墓地）が造られた。緩やかな斜面を造成して墓が規則的に配置されており、中心には聖別を示す大きな十字架が建てられている。これは16世紀の初期キリシタンと共通する特徴である。本来の墓地の入り口は最下段にあり、その付近には現在の黒島教会を設計したマルマン神父をはじめ、黒島で亡くなった聖職者の墓が存在する。

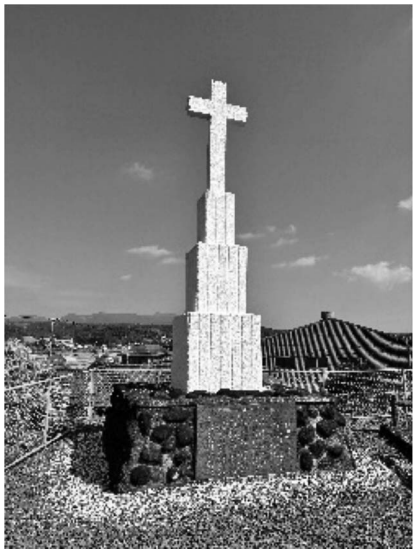
13日は、佐世保駅から大村駅へ移動し、大村市歴史資料館で展示を見学した。大村地域の戦国時代の領主・大村純忠は、横瀬浦・福田・長崎を貿易港として開き、南蛮貿易を推進した人物である。彼は日本初のキリシタン大名となり、日本初のヨーロッパ公式訪問団である「天正遣欧少年使節」をローマへ派遣した。このため、大村市歴史資料館ではキリシタン時代が一つの展示区画を成しており、関連資料のほか、天正遣欧少年使節に関するシアター映像やデジタルコンテンツを視聴した。

午後からは、キリシタン殉教地や大村藩主・大村氏に関連する史跡を巡検した。大村藩では、大村純忠の受洗後、寺社が破却され、領内の約6万人がキリスト教に改宗したと伝えられている。その後、禁教期に入ると、藩主は日蓮宗へ改宗し、1605年に本経寺を建立してキリシタン宣教師を追放した。本経寺には大村家墓所があり、歴代藩主の巨大な墓塔が並んでいる。これらは、仏教を信仰していることを示す象徴として建立されたとされる。



2026. 2. 13　本経寺の墓塔

禁教期の大村ではキリシタンへの迫害が続いた。1617年から5年間にわたり、外国人宣教師ら35名が捕らえられて殉教した。その牢の跡が「鈴田牢跡」であり、現在は十字架の碑が建立されている。



2026. 2. 13　鈴田牢跡

1657 年には「郡崩れ」と呼ばれる潜伏キリシタン発覚事件が起こり、406 名が斬罪となり、翌年には放虎原において 131 名が一斉に処刑された。受刑者たちが最後に妻子と水盃を交わしたと伝えられる「妻子別れの石」、斬罪跡に銅板レリーフをはめ込んだ殉教顕彰碑のある「放虎原殉教地」、さらし首にされた地に無原罪の聖母像が建つ「獄門所跡」、首を埋めた「首塚跡」、胴を埋めた「胴塚跡」を見学した。これらのキリシタン殉教関連史跡は、市内の住宅地に点在している。

その後、竹松駅方面へ移動し、帯取殉教地跡、今富キリシタン墓碑、田下キリシタン様式墓碑を見学した。これらの墓碑はいずれも県指定または市指定の史跡である。今富キリシタン墓碑は、大村純忠とともに受洗した重臣・市瀬越智相模栄正の、かまぼこ型の起立墓碑である。頭頂部には十字架が刻まれ、前面には日蓮宗の戒名が記されており、禁教期に仏教徒を装ったものとみられている。田下キリシタン様式墓碑は、1653 年建立の平庵型墓碑 2 基と野面型墓 1 基からなり、禁教期にキリシタン墓碑と判別されないよう地中に埋め、その上に仏式墓を建てた可能性が指摘されている。

以上の巡検を通じて、大村におけるキリシタンの展開と禁教期の様子を、史跡を通じて確認することができた。

2024 年度に引き続き、東京分室では今年度も長崎で共同調査を 2 回実施した。夏の調査では教会や大谷派寺院が直面している問題について現場の声を伺った。また今回の調査では宝亀教会の皆様のご尽力で、昨年度とはまた違った平戸における地域と宗教の関係についてお話を伺い、考察を深めることができた。お忙しいなか調査にご協力いただいた関係各氏に記して感謝申し上げたい。今後も東京分室では、地域と宗教の問題について考察を深めていきたいと考えている。

参考文献

大村市観光振興課発行『おおむらの史跡』
大村市観光振興課発行『大村キリシタン巡礼』
宝亀カトリック教会『宝亀教会献堂 125 周年記念誌　信仰のあかし』宝亀教会献堂 125 周年事業実行委員会、2023 年

海外研究調査報告（2025. 10. 1～2026. 3. 31）

大谷大学貝葉写本研究に関するタイ調査出張（1）

仏教写本研究　研究代表者・教授　DASH Shobha Rani

2025年10月31日～11月10日の期間中、大谷大学所蔵貝葉写本のDiplomatic Edition作成作業、現地資料調査、情報収集ならびに現地研究者とのネットワーク構築・懇談を主な目的として、以下の研究活動を行った。その詳細を以下のとおり報告する。

①大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本の研究：2024年度から継続的に進めている、本学所蔵パーリ語貝葉写本の一部の写本のDiplomatic Editionの出版に向けたレイアウト及び確認作業を、Suchada Srisetthaworakul博士（本班嘱託研究員）とともに実施した。加えて、当該写本のバリアントに関するインデックス作成についても、真宗総合研究所の協定機関であるDCI（Dhammachai Institute）所属のBunhchird Chaowarithreonglith博士など他の研究者を交えて協議を行うことができた。これらの助言を踏まえ、今後、出版準備を進める予定である。

②現地調査・資料収集・ネットワーク構築：
（1）長年にわたり調査の際に協力を得ているタイの第三級王室寺院Wat Thepthidaram寺院の副住職Phra Wisudthiwaraphon長老の依頼により、バンコクの仏教専門テレビチャンネルWBTVよりゲストとして取材を受けた。本学の紹介および仏教写本研究の意義について現地の方々に伝える機会を得た。



（2）本学JSPS外国人特別研究員であるWoramat Malasart博士（現在、報告者が受入研究者を務めている）の協力のもと、タイ国立図書館の写本部門を閲覧した。タイにおける写本の作成方法、種類、形状などについて実物を通して見学し、それらにおける仏教の影響を具体的に確認することができた。さらに、所蔵資料の一部を閲覧することができ、今後の研究資料として活用する予定である。





（3）Woramat博士の協力により、仏教写本および碑文研究者たちによる研究会を開催した。各組織における研究活動の紹介や、研究推進にあたって直面している課題について情報共有が行われ、どのような形で何を実施していくべきかについて意見交換を行った。



本研究会には、本班嘱託研究員のスチャーダ博士や Woramat 博士の他、ダッマチャイ本山教育部門のチーフ、フランス国立極東学院（EFEO）バンコク所長を含む現地の複数の研究機関から多数の研究者が参加し、貴重な情報交換の場となった。



(4) タイ国立図書館での調査の際、Wat Chakkrawat 寺院所蔵の貝葉写本について、現在保存・整理作業が進められているとの情報を得て、現地を訪問した。担当者である Watan 博士は国立図書館写本部門の研究者であり、タイにおける貝葉写本研究に精通している。



保存・整理作業を実地で見学できたことは貴重な経験であり、今後の研究に大いに資するものである。あわせて、整理済み写本を今後の研究資料として提供する可能性についても協力を得られる見通しである。

(5) マヒドン大学宗教学部を訪問し、昨年度に引き続き学部長の Dr. Pairor Makcharoen と懇談を行った。今後、両機関がどのように協力しながら共同研究を進めていくかについて意見交換を行った。



また、同学部講師の Sanjoy Barua Chowdhury 博士とも懇談する機会を得た。Chowdhury 博士はバングラデシュ出身の仏教徒であり、今後、バングラデシュにおける写本情報の収集に協力する意向を示された。さらに、本研究所の取り組みの一つである「タゴールと仏教」シンポジウムの出版に関し、論文投稿の可能性についても協議を行った。



アメリカ真宗センター出張報告

国際仏教研究　研究員・准教授　Michael J. Conway

国際仏教研究では、真宗大谷派の開教活動に用いられる英文教材の作成を担当しているアメリカ真宗センターと共同研究に取り組んできたが、2023年度から、金子大榮師の『浄土の観念』の英訳を出版することに向けて、協力している。

そのプロジェクトを遂行するために、報告者は、『歎異抄』ワークショップの終了後、3月9日（月）に空路にてロスアンゼルスに赴き、9日と10日（火）に真宗大谷派のロスアンゼルス別院にてアメリカ真宗センターの出版担当者（長谷川智行氏）と、出版に向けた詳細な打ち合わせを行い、完成している下訳の編集作業にも着手した。

先ず、出版に向けて、長谷川氏と、本の内容や形態について、詳細な相談をした。英訳以外に載せる本の内容（翻訳者の序文や参考文献リストなど）や目次の提示の仕方、出版形態（紙とｅブック）、本の形態（大きさ、カバーのデザインや、カバーに用いる画像の準備、総ページ数、柱と扉の内容、紙の色や質、使用するフォントなど）について細部まで丁寧な打ち合わせを行った。

そこで決定したことの一部を報告すると、2020年3月に報告者が完成した『浄土の観念』の英訳の草稿は、85,000語になっているから、多少の厚みを持たせるために、本を小ぶりの大きさにし、読みやすさを考慮して、クリーム色の紙と見やすいフォントにすることにした。またフォントの選定について、『The Eastern Buddhist』の第三シリーズを始めた際に参考にした材料を長谷川氏に提示し、今回のプロジェクトでも参照するよう、お願いした。カバーの画像については、江戸期の木版の口絵に使われている阿弥陀仏の浄土の描写を使用することにした。

その上で、編集の過程において誰が何をするのかということを確認し、その編集のプロセスを踏むスケジュールについても協議し、決定した。今年の12月末までに、報告者が、草稿を見直し、最終稿を拵えると共に、序文と参考文献表を作成し、序文やカバーに使う画像を用意することにした。その上で、アメリカ真宗センターのセンター員が編集を行い、報告者が修正を確認し、センター員が組版と校正を行った上で、報告者が最終校正を行うといった、編集・校正過程の内容を決定した。2026年12月に原稿等を入稿し、2027年6月までに出版できるように、スケジュールを組んだ。

その後、長谷川氏と、草稿の原稿を確認し、訳語の統一に関して協議し、検討を要する翻訳を取り上げて、確認し相談した。



長谷川智行氏との打ち合わせ

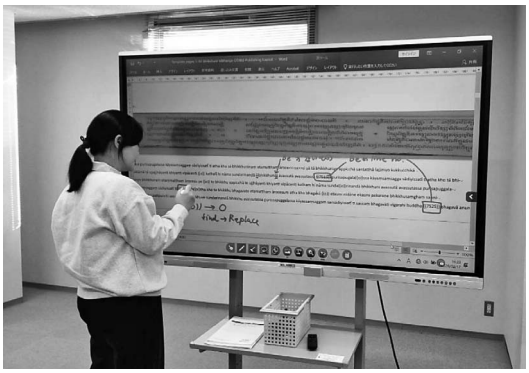
以上のように、今回の出張で行った打ち合わせと編集作業によって、出版の形態を明確に決定し、出版までのスケジュールを定め、そしてそれぞれの取り組まなければならない作業の内容を確認することができた。

2027年の2月にも、センター員が取り組む編集作業および組版作業に関する確認と相談を行うために再びロスアンゼルス別院を訪問し、長谷川氏と会うことを予定している。

大谷大学貝葉写本研究に関する研究会開催・タイ調査出張（2）

仏教写本研究　研究代表者・教授　DASH Shobha Rani

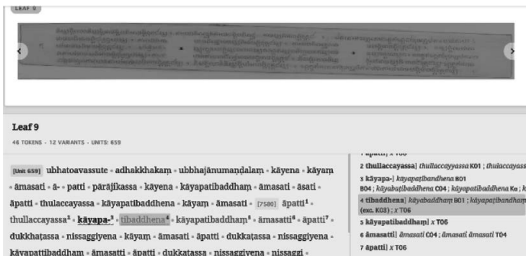
【研究会開催】：本研究班の研究活動の一環として、2026 年 2 月 15 日～26 日（内、研究所業務 6 日間）の間、嘱託研究員の Dr. Suchada Srisetthaworakul 博士を招聘し、大谷大学所蔵貝葉写本のデータ整理、文字解読および確認を中心とした作業ならびに研究会を実施した。一部の写本の写真データについて整理・確認作業を行い、Excel 表にまとめた。本資料は、Diplomatic Edition の出版の際に本文が始まる前に提示する予定である。また、数か所の解読確認作業を行い、そのバリアント（異語）検討のための底本選定も実施した。



【タイ調査出張】：2026 年 3 月 20 日～31 日の期間中（内、3 日間は研究資料費による個人研究）、大谷大学所蔵貝葉写本の研究、Diplomatic Edition 作成および確認作業、現地資料調査、情報収集、ならびに現地研究者とのネットワーク構築・懇談を主な目的として、タイへの調査出張を行った。調査内容の一部を以下に報告する。

大谷大学所蔵貝葉写本の研究：大谷大学所蔵貝葉写本の一部の Diplomatic Edition 出版に向けたレイアウトおよび確認作業について、嘱託研究員の Suchada Srisetthaworakul 博士、真宗総合研究所の協定機関である DCI（Dhammachai Institute）所属の Bunhchird Chaowarithreonglith 博士をはじめとする複数の研究者と研究会を実施し、最新の研究手法に基づいて作業を進めた。南アジアおよび東南アジアで用いられるローマ字転写法と西洋式ローマ字転写法との間には、とくに sandhi 処理において差異が見られることが確認され、それぞれの利点・課題について検討を行った。その結果、専用プログラムによる処理においては、西洋式転写法を用いることでより多くのバリアントを取得できる可能性が指摘された。

さらに、当該写本のバリアントに関するインデックス作成についても、DCI の人文情報研究者を交えた研究会を開催した。最初の 50 フォリオ分のデータを用い、バリアント表の試作および当該写本の系統分析手法の検討を行った。これらの成果と助言を踏まえ、今後の研究および出版準備を進める予定である。

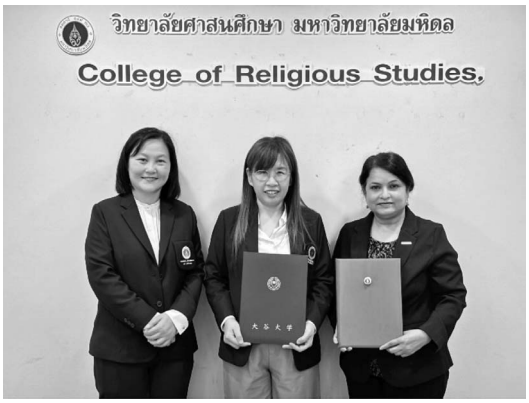




貝葉写本の使用文字の精査：『大谷大学貝葉写本目録』に記載されているいくつかの貝葉写本の使用文字について従来疑問が指摘されていた。本調査では、多くの画像データを参考し、DCI 所属のネイティブ学僧二名の協力を得て研究会を実施した。その結果、使用文字に誤りがあることが明らかとなった。その詳細は、『真宗総合研究所研究紀要』に論文として公表する予定である。



国際ネットワーク構築：3月26日、大谷大学とナコーンパトム所在のマヒドン大学宗教学部（Mahidol University College of Religious Studies）との間で学術交流協定が締結された。締結後には懇談会が行われ、今後の共同研究として、貝葉写本の包み布に関する共同シンポジウムを開催する予定である。報告者はこれまでにも同大学を複数回訪問し研究交流を重ねてきたが、その蓄積が本協定締結という成果につながったものであり、今後さらなる共同研究の発展が期待される。詳細については、https://www.otani.ac.jp/news/2025/lg8c9g0000002sim.html（大谷大学）；https://www.facebook.com/share/p/1DYP6AER8h/（Mahidol University College of Religious Studies）を参照されたい。



包み布の調査：アユタヤ所在の Wat Phanan Choeng 寺院は14世紀に遡る寺院であり、アユタヤが都として整備される以前に建立されたとされる。同寺院には多数の貝葉仏典が所蔵されており、現在、それらの包み布については、真宗総合研究所の協定機関であるDCIの協力のもと展示準備が進められている。本調査では特別許可を得て、これらの写本および包み布の一部を閲覧することができた。なお、大谷大学博物館にも本研究班が対象とするタイ貝葉写本の包み布が63枚所蔵されており、今後の共同研究によるその詳細解明が期待される。





歎異抄ワークショップ開催・参加報告（2025. 10. 1～2026. 3. 31）

第16回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究　研究員・准教授　Michael J. Conway
研究補助員　大谷大学大学院人文学研究科真宗学専攻博士後期課程　第2学年　山名 大河
大谷大学大学院人文学研究科真宗学専攻修士課程　第2学年　新川 伊織

第16回『歎異抄』翻訳研究ワークショップに参加するために、報告者は、本学の大学院生2名および木越康研究代表者とともに3月4日にカリフォルニアに渡った。ワークショップは、2026年3月6日（金）から8日（日）までカリフォルニア大学バークレー校の主催によってバークレー市内の浄土真宗センターにて開催された。

今回のワークショップでは、例によって、三つの作業部会に分かれて、『歎異抄私記』（ブラム嘱託研究員担当）、『歎異抄可笑記』（嵩氏担当）、『歎異鈔講林記』（報告者担当）の英訳作業を進めた。『私記』と『講林記』における『歎異抄』「後序」の解説を英訳したが、前回のワークショップで『可笑記』における「後序」の解説を訳し終えたので、今回は、やり残していた『歎異抄』第12条に対する寿国の解説を英訳した。

今回のワークショップは、2017年から本学の真宗総合研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センター・カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所の三者協定に基づいて実施しているプロジェクトの一環として開催されたが、本プロジェクトの目的の一つは、国際的な場で活躍し、仏典の英訳に携わることのできる学生の育成であるため、プロジェクト開始の当初から、参加した大学院生が報告書を提出し、その一部を紹介することにしている。よって、以下において参加した2名の大学院生の報告書を掲載する。

先ず、山名大河研究補助員の報告は、以下の通りである。

私は、昨年3月にバークレーで開催された同様のワークショップから参加しており、昨年6月に本学において開催されたものを含めると3回目の参加である。本学からは、学生2名が木越先生とコンウェイ先生の引率のもと渡米した。また、龍谷大学から、5名が参加し、現地の参加者を含めると、約30名ほど参加していたと思う。この人数は、過去のワークショップを見てもかなり多くの参加者であったと思われる。

私は3日間のうち、初日を寿国の『歎異抄可笑記』、残りの2日間を深励の『歎異抄講林記』の英訳班に参加した。今回のワークショップは『歎異抄』後序の英訳作業であった。まず、初日の寿国班は昨年6月のワークショップで後序の英訳が終了したため、第12条の確認に戻った。作業の流れとしては、まず、『歎異抄』の原文をみなで素読し、『Collected Works of Shinran』の『歎異抄』の英訳を読んだ。その後、寿国の講録を読みながら、同時に英訳作業を行った。英訳について主に議論したのは、「上人」と「聖人」の英訳は「shonin/venerable master」のように使い分けるべきなのかということであった。また、疑問に感じたことは、正依の経論を「the primary sutras and commentaries」とし、傍依の経論を「secondary～」としており、「第一」「第二」といった順番をつけているように感じ、「正」「傍」という字が与えるイメージから離れてしまうのではないかと考えた。そのほかにも、反語の訳をどのようにするのか、本願を「Original Vow/Primal Vow」のどちらで翻訳するかなど、英語の訳出をした後で、本当に妥当かどうか、わずか一つの語句の解釈に対しても時間をかけて議論が行われた。

2日目と3日目は深励班に参加した。深励班は後序の英訳を行った。作業の流れとしては、まず、『歎異抄』の原文をみなで素読し、深励の講録を読み、事前に英訳した講録を読み、校正をしていくものであった。2日目の議論の主題としては、2つ挙がった。まず、深励は「休め字」という言葉を使っており、それをどのように訳すのかが問題となった。議論の末、「The “ka” that follows is a place holding sound without any particular meaning」という訳になった。特に意味はないが、文中の調子を整えるために挿入される言葉の訳し方やニュアンスがとても難しいと感じた。次に、後序に言及されている「くりごと」について深励は「同じことを繰り返し、繰り返しいうこと」と解釈しており、その例として源俊頼の「八千代」の和歌を例に挙げている。その出典の確認をしようとし

たが、現時点では明確な典拠を発見することができなかった。

3日目の議論のスタートは、「〜を痛む」の訳について pain という単語が当てられたが、文意的な意味としては嘆くに近く、pain だと（肉体的）苦痛、痛み、（局部的な）痛み、（精神的な）苦痛、苦悩になってしまうことから、bemoaning over が妥当ではないかという結論に至った。また、3日目の最後には全体会において、寿国班・深励班と今回、新川氏が参加した円智班（テキスト：『歎異抄私記』）の3つの班の後序英訳作業の報告がそれぞれなされた。円智班と寿国班は後序の英訳を全て終えたが、深励班が少し残ったため、今年の6月に龍谷大学を開催校として開催されるワークショップに持ち越しとなった。



『歎異抄私記』の作業部会

今回のワークショップでは、英語の議論がスピーディーに進むため、意見を言う前に次に進んでしまうことが多々あり、自分の英語力の乏しさを改めて痛感した。しかし、昨年に比べて、多くの意見交換や、セッション以外での、自分の専門研究や、私生活についての対話の中でも、英語を多用することができ、とても有意義な時間であったと思う。

『歎異抄』ワークショップは、6月の龍谷大学での開催で目処はつくそうなので、残り少ないが、積極的に参加して、江戸期の『歎異抄』理解と、英訳される過程で、どのように真宗の教えを『歎異抄』から受け止め、それを現代の日本や世界において、どのように展開していくべきなのかを考えていきたい。

次に、新川伊織氏の報告は以下の通りである。

普段の大学院の授業では『歎異抄』を中心に据えて学びを進める機会はそれほど多くないが、本セッションでは UC バークレーの参加者中心に原文を相当読み込んでおり、非常に高度かつスピーディーなディスカッションが展開された。

特に印象的であったのは、わずか一つの語句の解釈に対しても時間をかけて議論が行われた点である。原文ではよく主語が省略されるが、英語の文法上、主語を明確に示す必要がある。そのため、原文で省略されている主語をどのように理解するのか、またその理解をどのように共有するのかについて、丁寧な検討が行われていた。たとえば「祖師」「祖意」といった語を一概に親鸞と断定してよいのかという問題が挙げられる。『歎異抄私記』の後半部分、『歎異抄』でいう後序に相当する箇所において、円智にとっての「祖師」とは誰を指すのかが議論された。それは筆者である唯円なのか、あるいは「散善義」の文脈を踏まえて善導（Shandao）なのか、はたまた親鸞なのかといった点であり、複数の可能性を視野に入れた解釈が提示されていた。

また、「見ん」「宿をとらん」などに見られる助動詞「ん」の用法についても議論が及んだ。日本語では意志・推量など複数の解釈の余地があるが、英語に翻訳する際には、どの意味を採るかによって選択される語が大きく変わる。そのため、翻訳は単なる言語の置き換えではなく、原文の解釈を伴う営みであることを改めて意識した。さらに、日本語原文において主語が明示されていない場合、英語ではそれを推定して補う必要があり、この点も議論の重要な論点となっていた。

セッション以外の時間においても、互いの専門分野やキャリア、中長期的な目標などについて語り合う機会があった。英語と日本語を行き来しながら、自分の考えを言い換えつつ説明する過程で、自身の学びに対する姿勢の未熟さを実感すると同時に、真宗理解の視野を広げる貴重な経験となった。

その中でも特に、キリスト教文化の影響が強い社会において、イエス・キリストという実在の絶対的存在を前提とする宗教観が広く共有されている一方で、物体的に実在したわけではない阿弥陀仏という存在について、日本よりもむしろ強い関心が向けられているように感じられた。日本では深く問われることの少ない、素朴ではあるが根本的な概念について改めて考える契機となり、自身の理解を見直す必要性を強く感じた。

以上の報告から、参加した学生にとってワークショップ参加が、自身の学びに大事な刺激を与えたということが窺われる。

2026年6月26日（金）と27日（土）に龍谷大学にて開催される予定の次回のワークショップでは、下訳の確認作業が完了することを受けて、成果出版について協議を続けており、今年度中に新たな三者協定を結ぶ予定である。

真宗総合研究所彙報　2025. 10. 1 ～ 2026. 3. 31

■研究所関係

【研究所委員会】

◇第 4 回

日　　時：2025 年 10 月 1 日 12：20～12：55
場　　所：響流館 4 階　会議室
内　　容：1．特別研究員について
2．一般研究の発足について
3．2026 年度真宗総合研究所　事業計画（案）
4．2026 年度「一般研究（予備研究）」エントリーについて（報告）
5．『真宗総合研究所研究紀要』第 43 号について（報告）
6．その他

◇第 5 回

日　　時：2025 年 11 月 25 日 12：20～12：50
場　　所：響流館 4 階　会議室
内　　容：1．『真宗総合研究所研究紀要』第 43 号査読・校閲結果について
2．2026 年度　一般研究（予備研究）エントリーについて（報告）
3．2026 年度　PD 研究員の募集について（報告）
4．2026 年度　真宗総合研究所　研究計画（案）について
5．その他

◇第 6 回

日　　時：2026 年 1 月 8 日 12：20～13：05
場　　所：響流館 4 階　会議室
内　　容：1．『研究紀要』第 43 号について（報告）
2．2026 年度　PD 研究員の採用について
3．その他

◇第 7 回

日　　時：2026 年 2 月 18 日 16：10～17：45
場　　所：響流館 4 階　会議室
内　　容：1．紀要ガイドラインの一部改正について
2．意見交換について
①東京分室について
②一般研究（予備研究）について
3．2026 年度　PD 研究員について（報告）
4．モンゴル国立大学一行の来学について（報告）
5．その他

◇第 8 回

日　　時：2026 年 3 月 10 日 16：10～17：22
場　　所：響流館 4 階　会議室
内　　容：1．2026 年度　研究計画（案）について
2．特別研究員について
3．2026 年度　研究所体制（案）について
4．2026 年度　一般研究（予備研究）について
5．客員研究員について
6．紀要ガイドラインの一部改正について
7．研究所事業自己点検・評価について
8．その他

■「大谷大学樹立の精神」100 年

日　　時：2025 年 10 月 10 日 14：40～16：00
出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、西本祐攝、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：公開研究会開催に向けた打ち合わせと当日の役割分担等の確認

日　　時：2025 年 10 月 11 日 14：00～17：00
出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、西本祐攝、巖城大空
場　　所：響流館メディアホール
内　　容：大谷大学第三代学長・佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」100 年記念公開研究会

日　　時：2025 年 11 月 21 日 16：30～17：30
出 席 者：一楽真、戸次顕彰、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：年度末に向けての研究計画に関する打ち合わせ

日　　時：2025 年 12 月 8 日 18：00～19：00
出 席 者：一楽真、戸次顕彰、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：年度末に向けての研究計画に関する打ち合わせ

日　　時：2025 年 12 月 22 日 16：30～18：00

出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、西本祐攝、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：年度末に向けての研究計画に関する打ち合わせ

日　　時：2026 年 1 月 19 日 16 : 30～18 : 00
出 席 者：一楽真、戸次顕彰、西本祐攝、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：研究作業進捗状況の確認と今後の課題についての話し合い

日　　時：2026 年 2 月 2 日 16 : 30～18 : 00
出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、西本祐攝、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：著述目録の整理と研究作業進捗状況の確認

日　　時：2026 年 2 月 17 日 16 : 30～18 : 00
出 席 者：一楽真、西本祐攝、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：著述目録の整理と研究作業進捗状況の確認

日　　時：2026 年 2 月 24 日 16 : 30～18 : 00
出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：著述目録の整理と研究作業進捗状況の確認

日　　時：2026 年 3 月 16 日 16 : 30～18 : 00
出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：著述目録の整理と研究作業進捗状況の確認

日　　時：2026 年 3 月 19 日 10 : 30～12 : 00
出 席 者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、西本祐攝、巖城大空
場　　所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内　　容：著述目録の整理と研究作業進捗状況の確認

■国際仏教研究

【会議】
第二回「国際仏教研究班全体会議」
日　　時：2025 年 10 月 29 日　昼休み
（12 時 10 分～13 時 00 分）
場　　所：真宗総合研究所　ミーティングルーム（響流館 4 階）
内　　容：2026 年度の研究計画について
参 加 者：木越康、Dash Shobha Rani、Michael J. Conway、アマ・ミチヒロ、山名大河

【出張】
日　　時：2026 年 3 月 4 日～10 日
出 張 先：アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市浄土真宗センター
要　　務：第 16 回『歎異抄』ワークショップ参加
出 張 者：木越康、Michael J. Conway、山名大河、新川伊織

日　　時：2026 年 3 月 9 日～12 日
出 張 先：真宗大谷派ロスアンゼルス別院
要　　務：金子大栄師『浄土の観念』英訳の出版打ち合わせおよび編集作業
出 張 者：Michael J. Conway

■EBS（東方仏教徒協会）

【EBS 公開セミナー】
日　　時：2025 年 10 月 27 日 14 : 40～16 : 10
場　　所：響流館 4 階会議室
講　　師：Michael J. Conway

日　　時：2025 年 11 月 17 日 14 : 40～16 : 10
場　　所：響流館 4 階会議室
講　　師：Michael J. Conway

日　　時：2025 年 12 月 22 日 14 : 40～16 : 10
場　　所：響流館 4 階会議室
講　　師：Michael J. Conway

日　　時：2026 年 1 月 26 日 14 : 40～16 : 10
場　　所：響流館 4 階会議室
講　　師：Michael J. Conway

【EBS 公開講演会】
日　　時：2025 年 10 月 17 日 09 : 00～10 : 30
場　　所：響流館 3 階マルチメディア演習室（Zoom）
講　　師：Yale 大学准教授 Eric Greene

【EBS 編集委員会】
日　　時：2025 年 10 月 21 日 16 : 30～
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム（Zoom）
出 席 者：Robert F. Rhodes、John S. LoBleglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、David White、山内美智、筑田一毅、

加藤淳、安井明子、藤枝直子

日　　時：2026 年 1 月 13 日 16：30～
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム（Zoom）
出 席 者：Robert F. Rhodes、John S. LoBleglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、David White、山内美智、筑田一毅、加藤淳、安井明子、藤枝直子

【EBS 編集会議】
日　　時：2025 年 11 月 25 日 16：30～
場　　所：EBS 事務局（Teams）
出 席 者：Robert F. Rhodes、John S. LoBreglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、藤枝直子

日　　時：2026 年 2 月 16 日 16：30～
場　　所：EBS 事務局（Zoom）
出 席 者：Robert F. Rhodes、John S. LoBreglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、藤枝直子

日　　時：2026 年 3 月 16 日 16：30～
場　　所：EBS 事務局（Zoom）
出 席 者：Robert F. Rhodes、John S. LoBreglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、藤枝直子

■東アジア・北アジア仏教研究
【公開研究会】
◇国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける梅檀釈迦如来瑞像の流伝」
日　　時：2025 年 11 月 30 日
場　　所：大谷大学響流館マルチメディア演習室
講 演 者：
発 表 1：アンドレイ・テレンティエフ「「梅檀仏」再考」
コメンテーター：チンゲル
発 表 2：ソドノムドルジ・ヤンジンスレン「モンゴル人が著したザンダン・ゾーに関する若干の著作の検討」
コメンテーター：三宅伸一郎
発 表 3：チンゲル「清代における梅檀仏信仰」
コメンテーター：ヤンジンスレン
発 表 4：ノロブツェデン・アムガラン（モンゴル、ウランバートル）「モンゴルに流布した梅檀仏信仰」
コメンテーター：テレンティエフ
発 表 5：藤原崇人「金元時代の梅檀仏信仰」
コメンテーター：松川節
発 表 6：本井牧子「嵯峨清涼寺の「釈迦堂縁起」と日本における梅檀仏信仰」
コメンテーター：佐藤愛弓（日本、京都）
出 席 者：井黒忍、松浦典弘、宗周太郎、A. ボルマー、三宅伸一郎、伴真一朗、村岡倫（龍谷大学文学部教授）、松田孝一（大阪国際大学名誉教授；モンゴル科学アカデミー外国会員）、古松崇志（京都大学人文科学研究所教授）、都馬バイカル（桜美林大学リベラルアーツ学群教授）、B. トゥブシントゥグス（大阪大学大学院人文学研究科特任講師）、中村篤志（山形大学人文社会科学部教授）、V. トルスティフ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員、モスクワ国立法科大学教授）、堀内香里（京都大学大学院文学研究科特定助教）

【研究会】
◇国際ワークショップ「日本におけるモンゴル研究の現状と課題」
日　　時：2026 年 3 月 27 日
場　　所：大谷大学響流館マルチメディア演習室
講 演 者：
発 表 1：D. ザヤーバータル：「モンゴル研究の現況とその振興策」
発 表 2：松川節「日本におけるモンゴル仏教研究の発展と現況」
発 表 3：U. エルデネバト（モンゴル国立大学科学学部社会科学系列考古人類人口学科主任・教授）「モンゴルと日本の学者の考古学共同研究について」
発 表 4：B. オチルホヤグ、Ts. バータルチョローン（研究・協働担当副総長）、B. ボルドエルデネ（科学学部長）、O. ムンフバト（科学技術ウランバートル学部長）、S. ムンフバト（政治学・国際関係・公共行政学部長）、G. エルデブオチル（科学学部人文科学系列長）、Sh. トヤー（科学学部人文科学系列考古人類人口学科上級講師）「モンゴルと日本の大学間のモンゴル研究分野における共同の現況」
出 席 者：鈴木寿志、井黒忍、松浦典弘、A. ボルマー、小長谷有紀（国際モンゴル学会会

長）、松田孝一（大阪国際大学名誉教授；
モンゴル科学アカデミー外国会員）

■大学史研究

【全体会合】
◇研究会名
日　　時：2025 年 12 月 4 日 18：00～19：30
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出 席 者：釆睪晃、東舘紹見、西尾浩二、松金直美

【大学史関係資料研究・ミーティング】
◇第 1 回
日　　時：2025 年 12 月 11 日 18：00～19：30
場　　所：真宗総合研究所
出 席 者：釆睪晃、東舘紹見、松金直美
内　　容：資料整理方法、今後の方針を検討

◇第 2 回
日　　時：2026 年 1 月 8 日 18：00～19：30
場　　所：真宗総合研究所
出 席 者：釆睪晃、東舘紹見、松金直美
内　　容：今後の方針を検討

◇第 3 回
日　　時：2026 年 1 月 15 日 18：00～19：30
場　　所：真宗総合研究所
出 席 者：釆睪晃、東舘紹見、松金直美
内　　容：資料収集方法の検討

◇第 4 回
日　　時：2026 年 1 月 22 日 18：00～19：30
場　　所：真宗総合研究所
出 席 者：釆睪晃、東舘紹見、松金直美
内　　容：資料収集方法の検討

◇第 5 回
日　　時：2026 年 2 月 4 日 16：30～17：30
場　　所：真宗総合研究所
出 席 者：釆睪晃、東舘紹見、松金直美
内　　容：資料収集方法の検討

【清沢満之研究・ミーティング】
◇第 1 回
日　　時：2026 年 1 月 27 日 17：30～18：30
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出 席 者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興
内　　容：今年度の活動状況と課題の共有

■仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究
プロジェクト公開研究発表会】
◇第 29 回
日　　時：2025 年 10 月 24 日
発 表 者：Dr. Woramat Malasart
（JSPS Postdoctoral Fellow—Otani University, Kyoto）
会　　場：オンライン（Zoom）
発表題名：Transforming Text into Image: A Study of an Illustrated Traditional Kammaṭṭhāna（Meditation） Manuscript from 19th－Century Thailand

◇第 30 回
日　　時：2025 年 11 月 28 日
発 表 者：Sudha Gopalakrishnan
（Project Director, SAMHiTA and Executive Director, IIC－International Research Division）
会　　場：オンライン（Zoom）
発表題名：Towards Imagining Universal Access to Textual Knowledge
SAMHiTA: Building an Open－access Digital Repository of South Asian Manuscripts

【海外出張】

◇第 1 回
日　　時：2025 年 10 月 30 日～11 月 10 日
出 張 先：バンコク（タイ）
出 張 者：ダシュ・ショバ・ラニ（本班研究員・代表者）
Suchada Srisetthaworakul
（本班嘱託研究員・Mahidol 大学講師）
要　　務：大谷大学所蔵写本の研究、現地資料調査、情報収集、現地研究者とのネットワーク構築

◇第 2 回
日　　時：2026 年 3 月 20 日～31 日
（内、3 日間は研究資料費による個人研究）
出 張 先：アユタヤ・バンコク（タイ）
出 張 者：ダシュ・ショバ・ラニ（本班研究員・代表者）
Suchada Srisetthaworakul
（本班嘱託研究員・Mahidol 大学講師）
要　　務：大谷大学所蔵写本の研究、現地資料調査、情報収集、国際ネットワーク構築

【嘱託研究員招聘・共同研究】

日　　時：2026 年 2 月 15 日～26 日
（内、研究所業務 6 日間）
出 張 者：Dr Suchada Srisetthaworakul
（Mahidol University，本班嘱託研究員）
場　　所：真宗総合研究所、大谷大学博物館
要　　務：大谷大学所蔵貝葉写本のデータ整理、文字解読および確認を中心とした作業・研究会実施

【ミーティング・情報交換】

◇第 1 回
日　　時：2025 年 10 月 15 日 13：00～14：15
出 席 者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
Dr. Suchada Srisetthaworakul
（Mahidol University，本班嘱託研究員）
場　　所：オンライン
内　　容：タイ出張打ち合わせ・情報交換

◇第 2 回
日　　時：2025 年 12 月 3 日 16：30～18：30
出 席 者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
Dr. Anand Mishra
（Heidelberg University，本班嘱託研究員）
場　　所：オンライン（Zoom）
内　　容：目録データベース構築・公開作業

◇第 3 回
日　　時：2025 年 12 月 5 日 16：00～18：00
出 席 者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
Dr. Anand Mishra
（Heidelberg University，本班嘱託研究員）
岡圭介、加藤淳（大谷大学教育研究支援課）
宇野ヒカル（本班研究補助者）
場　　所：オンライン（Zoom）
内　　容：目録データベース構築・公開作業

◇第 4 回
日　　時：2026 年 1 月 20 日 15：00～18：00
出 席 者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
柏原信行（本班嘱託研究員）
宇野ヒカル（本班研究補助者）
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　　容：作業計画・意見交換・原稿作成

■宗教・社会研究

【出張】

◇2026 年 2 月 10 日～2 月 13 日
出 張 先：長崎県平戸市（カトリック宝亀教会他）、佐世保市（黒島教会他）、大村市（大村市歴史資料館他）
要　　務：共同研究テーマ「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－社会的なものとしての宗教－」に関わる調査の実施
出 張 者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

【公開研究会】

◇三研究所若手研究員合同研究会
日　　時：2025 年 11 月 22 日
場　　所：南山大学南山宗教文化研究所 1 階会議室（ハイブリット開催）
発 表 者：守屋友江、山田智正、佐藤麻貴（以上南山大学）、石原和（同朋大学仏教文化研究所）
出 席 者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

◇「現代日本の地域寺院と外国人仏教徒－宗教空間における関係性の諸相－」
日　　時：2025 年 12 月 15 日
場　　所：大谷大学響流館 3 階マルチメディア演習室（ハイブリット開催）
講 演 者：清藤隆春（北九州市立大学国際教育交流センター）
コメンテーター：徳田剛（大谷大学社会学部）
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

◇「一燈園研究のこれから－近代宗教史における一燈園の諸相－」
日　　時：2026 年 3 月 9 日
場　　所：関西大学東京センター（ハイブリット開催）
登 壇 者：水野友晴（関西大学）、大澤絢子（東北大学）、長舩樹（同志社大学大学院）、宮田昌明（一燈園資料館「香倉院」）、大橋良介（日独文化研究所）、末村正代（千葉経済大学）、長谷川怜（皇學館大学）、永岡崇（駒澤大学）
出 席 者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

【研究会】

◇長崎調査に向けての事前室内研究会
日　　時：2025 年 10 月 20 日 15:00～17:00
場　　所：親鸞仏教センター 5 階

発 表 者：西出勇志（共同通信）
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

【ミーティング】
◇第 11 回
日　　時：2025 年 10 月 6 日 13:00～17:00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：三研究所若手研究員合同研究会の打合せ、室内研究会の勉強会

◇第 12 回
日　　時：2025 年 10 月 20 日 13：00～15：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：次年度の研究計画書の作成、公開研究会及び共同調査の進捗に関する打合せ

◇第 13 回
日　　時：2025 年 11 月 10 日 13：00～17：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：三研究所若手研究員合同研究会の事前発表会、公開研究会に関する事前勉強会、共同調査に関する打合せ

◇第 14 回
日　　時：2025 年 12 月 8 日 10：30～16：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：公開研究会に関する事前勉強会及び共同調査に関する打合せ

◇第 15 回
日　　時：2025 年 12 月 15 日 13：00～15：00
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：公開研究会に関する打合せ、共同調査に関する打合せ

◇第 16 回
日　　時：2025 年 12 月 22 日 13：00～14：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室＋オンライン
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内　　容：共同調査に関する打合せ

◇第 17 回
日　　時：2026 年 1 月 19 日 13：00～17：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：共同調査に関する打合せ、成果報告会に関する打合せ

◇第 18 回
日　　時：2026 年 2 月 2 日 13：00～17：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：共同調査に関する打合せ、公開研究会に関する事前勉強会

◇第 19 回
日　　時：2026 年 3 月 3 日 14：00～15：00
場　　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出 席 者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：公開研究会に関する打合せ、所報原稿の確認

◇第 20 回
日　　時：2026 年 3 月 16 日 13：00～17：00
場　　所：真宗総合研究所東京分室
出 席 者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内　　容：次年度の確認、所報原稿の確認

■個人研究　高橋泉班
【学会発表・研究会参加】
◇九州人類学研究会研究発表会
日　　時：2025 年 9 月 21 日
場　　所：オンライン
要　　務：公開研究会参加
出 席 者：高橋泉

【出張】
◇2025 年 10 月 23 日
出 張 先：東洋大学
要　　務：研究報告
出 張 者：高橋泉

◇2025 年 12 月 4 日
出 張 先：東京都国分寺市内 J 教会
要　　務：現地調査、資料収集
出 張 者：高橋泉

◇2025 年 12 月 25 日
出 張 先：神奈川県内 Y 教会
要　　務：現地調査、資料収集
出 張 者：高橋泉

■個人研究　藤井麻央班
【学会発表・研究会参加】
◇九州人類学研究会研究発表会
日　　時：2025 年 9 月 21 日
場　　所：オンライン
要　　務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

◇西日本思想史研究会講演会
日　　時：2025 年 12 月 20 日
場　　所：オンライン
要　　務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

◇シンポジウム「「宗教弾圧」的想像力の系譜学Ⅰ」
日　　時：2026 年 1 月 31 日
場　　所：オンライン
要　　務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

◇現代民俗学会第 82 回研究会
日　　時：2026 年 3 月 15 日
場　　所：オンライン
要　　務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

◇シンポジウム「「宗教弾圧」的想像力の系譜学Ⅱ」
日　　時：2026 年 3 月 21 日
場　　所：駒澤大学
要　　務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

【出張】
◇2026 年 1 月 17～18 日
出 張 先：金光図書館
要　　務：資料調査
出 張 者：藤井麻央

◇2026 年 1 月 25～27 日
出 張 先：橿原神宮、天理教教会本部、天理大学附属図書館
要　　務：施設見学、祭典見学、面談、資料収集
出 張 者：藤井麻央

◇2026 年 2 月 20 日
出 張 先：日独文化研究所
要　　務：面談
出 張 者：藤井麻央

◇2026 年 3 月 31 日
出 張 先：東京療院
要　　務：施設見学
出 張 者：藤井麻央

■個人研究　繆寿楽班
【学会発表・研究会参加】
◇「新声巧語人間仏教学術論壇 2026」
日　　時：2025 年 12 月 26 日～27 日
場　　所：上海大学
開催形式：オンライン
要　　務：研究発表
発 表 者：繆寿楽

◇第二回チベット仏教研究会
日　　時：2026 年 2 月 26 日～27 日
場　　所：東京・東洋文庫
要　　務：研究会参加
参 加 者：繆寿楽

■共同研究　木越康班
【ミーティング】
日　　時：10 月 16 日 12：20～
場　　所：木越研究室
出 席 者：木越康・藤枝真・藤元雅文

日　　時：11 月 21 日 12：20～
場　　所：木越研究室
出 席 者：木越康・藤枝真・藤元雅文

日　　時：1 月 29 日 13：00～
場　　所：仏教教育センター分室
出 席 者：木越康・藤枝真

※「研究成果報告・各種事業報告」に記載されている
所属・役職等は 2025 年度当時のものです。

〈真宗総合研究所ホームページ〉

研　究　所　報　第 88 号

2026 年 9 月 1 日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2026 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute